Wasteful grace is moderate and bring up environment and a human being

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

もう

M·O·H communication

20号

2008 Summer

特集：文化

「文化が支える日本の心」

M·O·H通信 20号 特集：文化 「文化が支える日本の心」 2008 Summer

Vol.20
2008 Summer

contents

目次

特集「文化」

M・O・H対談「近江商人」をテキストに、現代の若者に伝えたいこと
文化は社会の"活力" 木村 至宏 & 森 建司……5

M・O・Hレポート―1「環境文化」は持続可能な社会への選択肢
地球市民の世紀へ、環境文化の創造 岡 靖敏……13

M・O・Hレポート―2 社員も村も心待ちにする、アストラゼネカの"C―day"
日本型CSR―進化への羅針盤 前浜 隆広……20

M・O・Hレポート―3 ―命をおくる、持続可能な場所として―
画家・ブライアンさんが描く 原風景 ブライアン・ウィリアム……27

〈ドイツだより―8〉
アウグスブルグから 原 修子……35

M・O・Hレポート―4
W・M・ヴォーリズの「三方よし」人生 末永 國紀……37

フォトレポート
ヴォーリズさんの建物 辻村 耕司……39

M・O・Hレポート―5
企業が地域から学ぶこと 弘中 史子……45

M・O・Hレポート―6 先人の良識を今に伝える
實語教・童子教を復刻 横関 隆幸……48

表紙写真：黒田のアカガシ

彦根の玄宮園

ショート・ショート
ふれあい　第十回『赤いふうせん』　中井二三雄……52
M・O・Hレポート―7
【温故】――いにしえに学ぶ　中江彰……53
「晩年成長期」　今関信子……59
「ぬちどうたから（命ど宝）」　畑裕子……61
「人間の学」（森信三先生著）を読む その三　井上昌幸……63
MOH-ECOTOURISM―9
ツーリズム最前線―新穂高　檀上俊雄……66
「高島森林体験学校開校の巻」（漫画）　オノミユキ……69
講演日記　……73
MOHニュース　……74
「ホタル」　三山元暎……75
本の紹介　……76
MOH通信概要　……77
読者からのお便り　……78

MOH川柳

senryu MOH

この町は　あなたのふるさと
大切に
森　奈菜（16才）

ほどほどに　地球が悲鳴を
あげている
松田　知也（16才）

ありがとう　あなたの笑顔に
助けられ
徳安　友里（16才）

君がいる　そしてわたしも
輝ける
関田　紫野春菜（16才）
……八幡商業高校

環境は　楽しい事が　大切だ
玉井　大輔（24才）
……滋賀県立大学

もったいない　こんなにある
とは　もったいない
谷村　巌（71才）

文化 ― 文化が支える日本の心

自立した意識でつくる「転換力」

前号で転換力について思いつくままに書いた。この経済至上主義社会にピリオドを打ち、持続可能型社会に変えていくためには、社会を構成する人々の、過半数が価値観を転換して、選挙の投票や、買物するときの判断基準を変えていかなければ、政治も産業も変わらず、新しい社会など実現しないということが言いたかったのである。

モノの豊かによる幸福感は、経済至上主義へと至る絶対的な価値観を生んだ。したがって、生きがいも、快楽も、希望も経済的価値観の中だけで見出してきた現代人には、価値観を転換することは不可能に近いと思う人もいるだろう。

しかし、価値観の転換はそれぞれの個人が持つ「自立した意識」を前面に押し出す事によって実現できる。

経済至上主義社会の理念では、モノのもつ存在感にだけ価値を見つけ、モノを改良、改善あるいは発見、発明することによってのみ、経済の拡大を図ってきた。その結果、個々の人間の胸のうちにある「意識（哲学）」は長い間軽視され続けている。経済発展がいかに人を幸せにするか、先進国と後進国の比較を見せ、すべてのシステムが経済社会対応型人間を育てるように仕組まれて

来た。理数工学系で成果を挙げる事が、教育にとっても、企業にとっても、本人の所得にとっても評価され、その人たちを尊敬の対象とすることが社会常識となっている。

しかし、人生の生きる喜びは果たしてモノのみと考えていいものだろうか。少しぐらい貧しくても、世代を繋ぐ大勢の家族に囲まれ、近隣の打ち解けたお付き合いや、趣味や志を同じくする人たちと交わって暮らす生き方もある。大金を抱え、孤独のうちに死んでいくより幸せな生き方があるのだということに「意識」が及ぶならば、行動の選択肢はたちまちに広がっていくはずである。

ただし、そのためには、個々人が「自立した意識」を持ってあたる必要がある。人々の意識を拘束して、経済的思考を第一のものとするようなシステムの中にいるがゆえに、心の支えを『文化』から学びたい。

（森　建司）

●対談 木村 至宏 vs 森 建司

成安造形大学 学長
循環型社会システム研究所 代表

〈文化「文化が支える日本の心」— ① 滋賀の文化と環境〉

The culture is social vitality

文化は社会の“活力”

「近江商人」をテキストに、現代の若者に伝えたいこと

かつて、経済とともに文化の担い手でもあった近江商人は、商いで得た利益を地域社会に還元し、社会の文化の向上に大きな影響を与えました。自らの利益のみを追求するのではなく、社会全体の利益のために、商いの才を競った近江商人たちは、まさに「知性」という文化の担い手ではなかったでしょうか。近江商人をテキストに、次代の文化の道標は何かを探って、成安造形大学の木村至宏学長に、森代表がお話をうかがいました。

■成安造形大学／大津市仰木の里
■2008年2月12日

現代において、近江商人が再評価されるのはなぜか

森　本日は現代の若者にも精通しており、近江商人にも造詣の深い木村学長に、文化にとって一番重要であろう知性や感性について、お話をお聞きしたいと思います。

今この時代に、近江商人の経営理念が再評価されるのは時代の要求だと思うのです。経済社会で、人が企業の歯車になるのではなく、能力や個性を生かしながら、互いが尊重し合うような、そんな会社で働きたいと考えているようです。だからこそ、近江商人に脚光が集まると思うのですが。

木村　そうでしょうね。そもそも近江商人とは、近江の人が名乗りだしたのではなく、各地の〝買い手〟の人たちが呼び始めたんです。あそこの商品は間違いないというので、そういう呼び名が定着したのでしょう。近江商人の経営理念の高さが、何を背景にしていたのかというと、やはり、感謝の心であったと思いますね。

森　進取に富む一方で、道徳心や高い理念は失わない。ここに現代人は惹かれるのかもしれませんね。

木村　近江商人は江戸末期には複式簿記の方式を採り入れてましたから、ハイカラとも言えるのですが、やはり根っこのところは〝あきんど〟であり、非常に人間的であったと思います。見ず知らずの土地へ行商に出かけ、ほかの商人に先駆ける開拓者ということですから、プレッシャーも凄かったと思いますが、初めての土地でどうするかといえば、人と人のつながりというコミュニケーションしかないわけです。聞いた話によると、まず最初に家々の干し物を見て、川での洗い物を見て、何があって何が足りないのかを調べたそうです。

森　洗濯物を見れば、生活の豊かさ加減も窺えますからね。

木村　おそらく最初に売れるのは太物（綿織物、麻織物）の肌着や古着なんですよ。でも、すぐに商いが成立するわけじゃなくて、お宮さんやお寺で一晩過ごして、段々と土地の人に話しかけていくんです。その時に〝商売してやろう〟という気持ちだと、相手は引きますよね。話してもくれないでしょう。ですから近江商人がどういう気持ちで人に接したかというと、おそらくは近江の本店で仕込まれた「おかげさま」であるとか、「何が喜んでもらえるだろうか」ということだったと思います。古着でも着れば暖かい。暖かいということは喜ばれますからね。そういった商いの原点が、今、見直されるべきではないでしょうか。

感性とコミュニケーション能力を鍛える時期が必要

森　実は私も丁稚に行った経験があります。父親から「阿呆になる修行に行って来い」と言われ、その時は親父は何を言い出すんだろうと、言葉の意味がわからなかったんです。そこから追々、頭を空っぽにして身体で商売を覚えてこいと、理論や理屈で商ごとはできないんだということなのだと、わかり始めたのですが。

木村　奉公先は何のお商売をされていたのですか？

森　繊維業です。しかし、私が丁稚にあがったのは、日本橋にあった店舗だけではなく、主人のお宅も交代で勤めたものです。そのお宅の子どもを私学の幼稚舎に送り迎えするのも仕事の一つで、当時は遠足にまで丁稚がお供をしたんです。子どもから「恥ずかしいからあっちへ行って」なんて言われながらです(笑)。それで思い出すのは、朝、子どもたちに靴を履かせる時、番頭さんは靴紐を結んでやりながら、「今日は雨が降ってるからなぁ。濡れんようにいこうなぁ」と語りかけるんですね。それが私たち若い丁稚にはできなかった。内心、靴ぐらい自分で履きやがれと思ってますからね(笑)。きっと恐い顔をしてたでしょうから、子どもも嫌がります。しかし本当は、冗談の一つも叩かれても、ニコニコしていられるのが修行ではなかったかと思います。対人間ということでは、そういうことを覚える時期が要るのではないでしょうか。近江商人でなくても、昔の商家では長男を丁稚に出して、次男からは上の学校に行かせ、そのかわりに卒業したら自活しなさいと。それで跡を取った長男を尊敬しなさいというパターンが多かったですよね。長男には学歴が無いのだけれど、阿呆になる修行をしてますから、商いの感性は磨かれているんです。

木村　そのとおりだと思います。感性と、今の人たちに一番欠けているといわれるコミュニケーション能力。これがきちんと備わっていたんです。

森　ところが今の経済社会では、感性をむしろ削ぐ形で、理論や理屈を優先するでしょう。そこがおかしいと思うのですが。

木村　確かにそれは一つのアンバランスです。それが商売の世界のみならず、いろんな面において広がっていると思います。例えば学生も、自分の意見は凄く言うんです。でも、それを書きなさいとなると、書けないんです。箇条書きのようになってしまって、文章にならない。話し言葉というのは、言った途端に

制作風景

大学ギャラリーアートサイトにて

近江への愛情があふれる対談風景

消えてしまいますから、これは怖いことでもあるんです。ですから、きちんと相手に伝えるには、やはり文字にして書くことなんです。ところが話し言葉ではちゃんと喋れるのに、なぜ書かない、書けないのか。それに当て字が多いです。こちらが思いつきもしないような見事なものがあります（笑）。

森　おそらくパソコンの変換ミスですよね。

木村　多分そうです。ですからそういう時に、間違いを指摘してくれる先輩や友人が必要なんです。でも、間違いに気づいた方は、うるさいヤツだと思われるのが嫌で、黙ってるでしょ。そうすると間違いをした当人は気づかないままですよ。

森　コミュニケーション能力の問題が、学力にも影響を及ぼしている、そんな気がしますね。

民衆の中で育まれる文化と、近江商人の知性

森　ついこの間、製材所を営む知人が、江戸時代に寺子屋で使われていた教科書の複製本を作り、それを見せてもらいました。彼の地元の木之本町にある江北（こほく）図書館で見つけたそうで、その存在をもっと地域の人に知ってほしいと手がけたそうです。すべて漢文で記されていて、昔の人はこんなに難しいものを勉強していたのかと驚いたのですが。

卵型の校舎

木村　それは嬉しくなるお話ですね。まさに文化ですよ。だってその方は、普段は製材業に励んでおられるんでしょ。

森　そうです。林業で利益を生むにはどうすればいいかと、侃侃顎顎（かんかんがくがく）やっているおじさんが、家に帰ると寺子屋の教科書に熱中しているんです（笑）。

木村　それこそ文化性が豊かじゃありませんか。文化というものを学識者や文化人と呼ばれる人が様々に論じますが、私は文化そのものについては、もっと目線を下げたところに非常に豊かなものがあると思っているんです。

森　江戸時代だって町人文化と言いますものね。町人というのは、商人や工人だったわけでしょ。

木村　そうです。近江商人も文化の振興という点においては、協力者、先導者的な役割を背負っていたと思います。それが商いとはまた別の近江商人の側面です。私も少し前に、日野町史（滋賀県日野町）の編纂をお手伝いしたのですが、日野商人の子孫のお宅に、非常に沢山の書画や書状が残されているんです。それを拝見すると、江戸時代に幾人もの画家が大津ではなく、はるばる日野を訪れ、盛んに交流していたことがわかります。日野商人が彼らの芸術活動を支えていたんです。

森　なるほど。近江商人の知性や感性が、そういうパトロン的な行為につながっているのでしょうね。近江商人の家訓にしても、あれだけの文字と文章力ですから、文化レベルの高さが窺えます。それをまた奉公人が読んで理解したというのも凄いことだと思うのですが。

木村　今の私たちが理解しようと思うと、まず読める字に変えてもらって、次にその文章が何を言っているのか、解釈が必要になりますからね。

森　近江商人の家訓は、創業者ではなく二代目、三代目によって書かれたものが多いそうですね。創業者は家訓どころじゃなくて、子どもや孫の代で文化レベルが向上したということでしょうか。

木村　やはり大きな商いをすればするほど、交友関係が広がりますよね。その中には、十人十色でいろいろな個性の人がいますから、おのずと自分の視野も広がっていく、そういうものだと思います。

「寺子屋の学びを今一度」森氏

文化力――競い合うことで昇華され、支えあうことで継続する

森　近江商人が商いで得た利益を地域に還元したように、文化面においても

地域への貢献があったのでしょう？

木村　もちろんです。近江商人は八幡商人と日野商人、それに五個荘や愛知川のいわゆる湖東商人の大きく三つに分けられますが、それぞれに商法が違います。八幡商人は江戸の日本橋にずらりと軒を並べ、日野商人はあちこちに支店を設けました。

森　日野商人は、必ずしも大都市ばかりに支店を設けたのではなかったのですよね。

木村　群馬県の桐生市や伊勢崎市など、北関東地方では近江屋という屋号が今も残っています。米屋や醤油屋など特に醸造関係については、今のご主人の三代前に遡ると、おおよそ日野商人にたどりつきますね。そして特に地域のお祭りに、近江商人の貢献がうかがえます。水口祭り（甲賀市水口町）の水口囃子や、日野囃子（日野町）は江戸の神田囃子の流れを汲み、近江商人によってもたらされたとされますし、秩父祭り（埼玉県秩父市）の秩父囃子にも近江商人が関係しているとされます。

「祭りが文化力を支える」木村氏

森　秩父というと、近江商人の拠点地として知られますよね。

木村　そうです。水口囃子は日野祭りの囃子が、そのまま伝播されていますし、秩父囃子にしても、そこでお互いが文化を競うことによって、より昇華されていったのだろうと思います。やはり文化というのは、お互いが競争しないと発展しません。ですから良きライバルをたくさん持っているほど、自然にレベルが上がっていきます。これを「文化力」というのだと思いますね。

森　特に祭りとなると、町内や集落ごとに団結もしますし、地域が活性化します。

木村　まず祭りを消滅させてはならないと思いますよね。誰か一人でも後世に伝統を伝えようとか、そういう熱心な人がいなければ存続は困難ですし、それに祭りとは参加する人があってはじめて継続するのです。参加する側とされる側、例えば曳山に乗っている人たちも、観客が多ければ多いほど無形の力が得られます。ですから文化というのは、支えあうということ、これが大きな要素ではないかと思います。

森　皆で一つの目標に向かって行動する中で、責任や信頼、いろんなものが醸成されていきます。今の若い人たちにも、そういう機会を数多く経験してほしいですね。

心の潤いは、文化に接触することから

森　ところでかねてから私は、21世紀は女性のパワーが発揮される時代だとあちこちで申し上げているんですよ。子どもや孫の世代まで「持続可能」ということを考えられるのは、女性の感性だと思うからです。もし女性の活躍が進めば、文化や宗教など、あらゆる方面にも変化がもたらされるのではないでしょうか。

木村　そうですね。心の潤いや感動、感激、そういったものを感じたり、また誰かに感じさせたりというのは、自分がいかに文化そのものに接触するかによるんです。その中で一番大きなファクターは、自然と人、人と人との接触であり、そこからまた別のものとの出会いにつながっていくんです。そういうことから思うと、女性は年齢を重ねるにしたがって、文化への欲求度が高くなっていきますから。

森　男性も現役のうちは間に合うんですよ（笑）。ところが退職した途端に、何をすればいいのかと…。

木村　企業戦士であればあったほど、町内会では扱いにくい存在になったりね（笑）。

森　まさにそうです。男性は生涯を貫いて志を立てる、なんてことに美学を感じますから、どうも転換するのが下手なんじゃないでしょうか（笑）。女性は見事に転換しますからね。

木村　柔軟なんですよ。男というのは、気が弱いのに一応ポーズをとりたい。ですから男の人が先頭に立ってやっていることでも、怖くて見ていられないようなことがたくさんありますものね。

森　ええ、ですから私は、21世紀の社会が柔軟で包容力があって、まさに母性愛に目覚めるような社会に向かってほしいと思います。

成安造形大学を”根っこ“とする「近江学」の開講

森　最後になりましたが、今春から学内に「近江学」という科目を設置されるそうですね。それを私は、滋賀県立大学の「近江環人」（※同大学が地域再生のためのリーダー育成を目的に開催する学座。今年4月に「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）」の称号を持つ初の卒業者が誕生）と対に並べて考えたくなるんです。県立大学は環境、成安造形大学は文化という、それぞれの視座から滋賀県をより深く紐解こうというものでしょう。

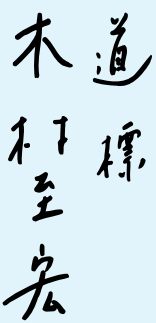
「近江学を学ぶ」講演にて、木村氏

木村　そうですね。私も残り一年で学長として任期満了を迎えます。最後にこの大学に少しでも貢献できればという思いで、この4月に「近江学研究所」を立ち上げるべく準備に追われています。既に東北学や京都学など、確立された地域学があるわけですが、この近江の地にも学問として体系化できる地域性や特徴がいろいろとあるはずです。それを分析する研究機関の根っこがどこにあるのか、根っこが曖昧ではいけないと思うんです。ですから成安造形大学がその根っこであり、大学として知の体系を蓄積するのだと、そういう思いでいます。

森　芸術はもとより、歴史や民俗、そして自然環境という観点で近江を紐解いたとき、先の近江環人の活動と重なる部分も出てきますよね。その時に互いが意識しあい、競い合うことによって、滋賀県の文化がさらに醸成されればと願っています。本日はどうもありがとうございました。

木村　こちらこそありがとうございました。

近江を支える地域学と経営学の双翼



●きむら　よしひろ＝1935年、滋賀県生まれ。大谷大学大学院文学研究課中退。日本文化史専攻。90年、大津市歴史博物館初代館長。成安造形・大谷・京都橘女子・放送各大学非常勤講師を歴任。成安造形大学教授を経て2000年に同大学長に就任。07年、学校法人京都成安学園理事長兼任。

著書／「日本歴史地名大系　滋賀県の地名」（共編著／平凡社）「琵琶湖　その呼称の由来」「近江　山の文化史　文化と信仰の伝播をたずねて」「近江の峠道　その歴史と文化」（いずれもサンライズ出版）など多数

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など

著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎「中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営」サンライズ出版。

●成安造形大学＝所在地／〒520-0248　大津市仰木の里東4-3-1
URL.http://www.seian.ac.jp/

M・O・H レポート1
〈文化「文化が支える日本の心」―②人〉

地球市民の世紀へ、環境文化の創造

岡 靖敏
環境文化職人／グローバル環境文化研究所（GEC）

I create environmental culture

「環境文化」は持続可能な社会への選択肢

「未来の持続可能な社会で、誰もが享受する文明・文化を、現在に遡って言い表したのが“環境文化”ー」と語る岡靖敏さんは、これまでNGO・NPOの立場から、数多くの環境計画や環境教育、市民会議づくりに携わり、環境文化創造へのゆるやかなアプローチをはかってこられました。岡さんのお話とともに、私たちも、未来の生活文化について、考えてみませんか。

■大阪市中央区／グローバル環境文化研究所
■2008年2月

「環境文化」は新しい社会における生活のありよう

最近、環境省が「各主体がパートナーシップを築き、コラボレーション（協働）による環境と経済と社会が好循環した持続可能な発展」ということを盛んに提唱していますが、これは、GEOの目的である〝循環と共生を基調にして、地球環境に健全な文明・文化を私たちが手にすること〟と同じことだと言えるでしょう。そうした新しい社会における生活のありようを、私は今のところ象徴的に「環境文化」と呼んでいます。その前提には、気候変動という人類が解決すべき地球規模の喫緊の問題があるということを確認しておく必要があります。

環境文化とは、硬く言えば環境負荷の少ない、自然のサイクルに沿った「循環」と、人と自然、人と人、地域と地域などの「共生」を基調とした循環社会、地球という共通の大地に生きる地球市民として、市民参加と情報公開が保障され、存在の豊かさなど価値多元的社会、生活文化の創出をいいます。環境文化を築くことが21世紀を生きる人類の文明的課題です。その社会像は、まだまだわかりにくいと思いますが、今までとはまったく違った、表のような循環社会になることは明らかです。

新しい社会は、「環境革命」によって形成される

私は循環社会は、「環境革命」によって達成されるものだと思っています。これは人類史上、農業革命から産業革命に次ぐ第三の革命といわれる文明的なパラダイムの変革です。

2020年、循環社会の主な構成要素

		主な構成要素
意識変革	思想・哲学・倫理	○環境倫理　○宇宙船地球号、地球閉鎖系　○コモンズ　○生命地域　○身土不二 ○風土・風景論、民俗・民族学　○市民主権社会　○地域コミュニティ　○エシカル・コンシューマリズム　○スローライフ　○環境の3R　○エコセンス　○環境と福祉の統合 ○環境教育・環境学習　○分かち合い　○新しい労働形態　など
政治・制度	条約・法律・制度・運動	○地球憲章　○国際環境法　○アジェンダ21　○ヨハネスブルグ実施計画　○地球環境問題に関する条約（気候変動枠組み条約、生物多様性条約など）　○子どもの権利条約 ○環境基本法　○循環型社会形成推進基本法　○地球温暖化対策推進法　○地方分権法 ○情報公開法　○NPO法　○環境影響評価法　○PRTR法　○自然再生推進法 ○食料・農業・農村基本法　○消費者契約法　○介護保険法　○IS014000S　○市民参加条例　○環境税　○社会保障基金　○市民オンブズマン運動　○グランドワーク活動 ○エコマネー（地域通貨）　○環境家計簿　など
経済・科学技術	循環型技術・産業	○太陽光発電、風力、燃料電池など地域分散型新エネルギー　○グリーンGDP　○水素自動車などエコカー　○エコタウン事業　○総合的交通需要マネジメント　○環境投資 ○ユニバーサルデザイン　○環境マーケティング（省エネ・省資源のモノ、サービス）とコミュニケーション　○レンタル、リース、メンテナンス、リサイクル産業、ESCO事業 ○ケア（介護・医療など）　○生涯学習　○持続可能な農林漁業、グリーンツーリズム ○ワークシェアリング　○職業としてのNGO／NPO　○市民公益事業　など

（岡、岩川・2001）

現在の状況を整理すると、産業革命（動力革命とも言います）により、これまでの牛馬や人力による物の移動から大量物資の移動が可能になり、つまり物流が始まり、大量消費の経済優先社会を生み出した結果、コモンズ（共有）に大量の汚染物が排出され、それが地球生態系の浄化能力を超えたということになります。そうなると「抑制」をしていくしかないわけで、地球の浄化能力、すなわち環境容量を超えない範囲で、いかに私たちが豊かに便利に快適に生きていくための社会を構築するか、その知恵が今を生きる私たちに問われているのです。しかし、既にできあがった仕組みを変えるのは非常に困難です。たとえば自動車は捨てて、昔に戻って歩くのだということは不可能ですし、昔にはもう戻れないのです。ではどうするのか。その一つは環境技術の革新により、究極は水で走る自動車であるとか、環境教育による人の意識変革とかを手にしていきながら、その一方ではエコシステムを取り入れた循環社会を構築し、私たちの新たな生命基盤として、それを維持していく必要があります。

エコシステムを生命基盤とした社会ビジョン

石油文明そのものは、もう終焉に差し掛かっています。ですから化石燃料に依存せず、環境負荷を抑制しながら、従来の豊かさを維持する方向に向かうべきなのです。そこでよく言われるのが、エネルギー効率の向上ということです。例えば大阪の電源は、黒部（富山県）や美浜（福井）などから送電されていますが、この間にエネルギーロスが65％程度あります。実際に使用しているのは35％程度というわけです。これを40％なり50％に向上させるには、発電施設との距離を縮めること。要は日本でもドイツや北欧のように物とエネルギーが、農産物の地産地消と同じように、ある程度の範囲内で循環する仕組みが必要なのです。そうすれば、エネルギーロスが改善され、CO_2の排出量を減らすことができ、何より新たな生命基盤を確保できるのです。もちろん、この場合の主なエネルギー源は、新エネルギーや自然エネルギーです。太陽光発電や風力発電などにより、エネルギーの自給率が向上した地域ビジョンというのは、なんとなく皆さん頭の中に想像できるのではないでしょうか。さらにいえば、そういう社会をめざすしか、実はもう選択肢はないのです。

循環社会の構築に、「国」として遅れをとる日本

だとすれば、そうした新しいインフラ整備に向けて、少なくとも数十年で達成することは国策だといえますが、残念ながら日本の政治（家）は世界観がないのか、哲学がないのか、いまだ目先の利権にしがみつき、無策なのが実状です。97年の「京都議定書」への批准も、単に”温室効果ガスを6％減らせばよいのだ“と、公約の意味が正しく捉えられていないように思います。循環社会へのプロセスとして6％削減（今世紀中にカーボンマイナス60％とIPCCは指摘し

ています）は必要ですが、もう一つの意味はあまり言われませんが、2012年までには今の社会より温室効果ガスを6％削減した社会づくりなのです。

循環社会の構築に向けて、いまだ明確な国家戦略が描かれないままの「政治」に対し、「企業」は、環境効率化などあらゆる分野において、環境技術革新を試み、その果実を得てきました。あとはその成果が、市場化、自由化できるかの段階なのですが、これは民間企業の努力だけでできることではありません。国策として、瞬間風速的に、巨額の資金を投じなければ、実現には時間がかかるのです。しかし、これも期待薄ですね。何故かというと、先述の、政治が、マスコミや評論家も含めテレビ的に「衆参ねじれ国会」と言い、「ねじれ」が国民にとってマイナスであるかのように使っています。そうではなくて、これこそが「分権」であり「分立」であり、民主主義の健全さです。共生の知恵を出すいい機会であり、国民にとってはいいことなのに、いまだこのレベルですから。

国策として取り組む時期がきた」岡氏

「環境革命」の幕開けとともに、世界の潮流が変わった

世界的に見れば、時代は今、環境革命の真っ只中にあるといえます。人類史を振り返ると、ご存知のように農業革命から18世紀後半に産業革命が起こり、今はその継続にあります。環境革命の起こりは、72年にストックホルムで開催された「国連人間環境会議」での人間環境宣言の採択がプロローグでしょう。同じ年に有名なローマクラブの報告「成長の限界」が公表され、87年国連の「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」の報告書『われら共有の未来』で、持続可能な発展が意味づけられました。この持続可能な発展を国際社会が合意したのは、92年にリオデジャネイロで開催された歴史的な「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」であり、サスティナブル・ディベロップメント（持続可能な発展）の概念が各分野で広く捉えられ具体化されるようになったことは、まさにエポックと言えるでしょう。

「地球は私たちの家、明日の世代のために」'92地球サミットで

その地球サミットで採択された「リオ宣言」の"地球は私たちの家"の理念とその行動計画「アジェンダ21」には、大気保全から貧困や人権、環境教育、各主体の役割資金などまで、21世紀に人類がめざすべき持続可能な社会づくりの具体的な行動が盛り込まれています。「アジェンダ21」をはじめ、「気候変動枠組み条約」や「生物多様性条約」などに各国が調印し、では、どの国が先駆けて行動に移すのか。世界の潮流は、今その段階にあります。そして、先に環境革命を達成した国々が、世界のリーダーとなるでしょう。ですから、日本はこのままでいくと、いずれG8のグループからも脱落するのではないか。いや、既に脱落していて、実はこのことはこの国にとって幸せなことかもしれません。というのが、私の捉え方です。

さらにいえば、今世紀の後半、世界の盟主となる国は、アメリカに代わって中国、もしくはインド、ブラジルではないかと思っています。この三カ国に共通しているのは、国土が未開発であり、特に巨竜といわれる中国と、巨象といわれるインドは合わせて23億の人間力としての巨大パワーを秘めた奥行き、可能性があることです。ただし、それには世界から尊敬される国家的品格が求められます。イギリスの産業革命から石油マネーによりアメリカへ経済覇権が移行したようなことが、今度は環境革命によってアメリカから中国などへ覇権が移行する可能性が高いのです。

アメリカ型資本主義経済を超えて

文明・文化の進歩というのは、やはり経済です。市場拡大原理の経済が行き詰ろうとしているのは、経済の専門家でなくとも、時間と空間、あるいは資源容量の限界という点からも見えてくると思います。例えばコンビニについていうなら、時間は一日24時間という限界に達していますし、空間は今後、月に出店するのかというところにまで

きているわけです。

これまでの延長線上で経済を考えることが不可能になりつつある今、1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・セン氏（ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学寮長）は、人間は多様な存在であるという前提に立ち、生きていく上での質を考慮して人間の福祉（暮らしぶりの良さ）と自由、環境と開発を評価する「潜在能力アプローチ」の経済学手法を編み出し、成長最優先の倫理なき経済学への警鐘を唱えています。例えば、豊かさを一つの経済指標にした場合、これまでの市場原理では、豊かさはモノや資本の量を獲得していくことだという価値観で来ました。しかし、少子高齢化・人口減少時代を迎えた今、資源のないこの国は、資源を取り崩さず利子で生活していける社会づくりをめざして量的価値から質的価値へ、内橋克人氏のいう「浪費による成長」から「浪費なき経済成長」と同根の、いわゆる所有の豊かさから存在の豊かさへと価値転換しなければこの国は生き残れないのです。

このように従来の市場拡大原理では、もう計れない段階にあるにもかかわらず、多くの経済学者や政治家は、いまだ過去からの延長線上でしか経済を考えられないことに、この国の不幸があると思います。

アメリカ型資本主義経済を超えて、いかに経済と環境と厚生を結びつけるか、そういう経済（学）へ、世界の潮流は向かっているのです。そして環境文化とは、こうした経済的なことも含め、持続可能な生活を保障し、産業活動や社会、暮らしのありようを創出することなのです。

「観念」から「実践」へ。20年後、環境文化の成就

環境文化という社会を、数十年で達成することができるのか。それにはまず、観念から実践への段階、時間が必要になります。簡潔に言えば、もったいないとか、江戸時代の暮らしに学ぼうとかは気づきの入り口で、多くの人々の心を動かすのは情動です。観念から実践・行動が求められている今、具体的に、週5日は自動車を利用していたのを、自転車利用や週3日に減らしたとか、環境家計簿をつけて省エネに取り組んだとか、そういう足元からの実践が要求されているのです。企業活動では、これ以上はないというぐらい、省エネへの取り組みが行われています。一般家庭でも、いかに省エネを実践するか。そのためにはCO_2削減を数字で把握できる、つまり可視化された仕組みと行動をいかに広げるか、それにかかっていると思います。

普段の生活の中で、具体的に何をするか。実践している人の事例に学び、そこから自分なりに、創造的に取り組んでみようとする行動が待たれているのです。それには、LOHASやスローという言葉に言われるように楽しいとか、おしゃれとかのエコセンスが必要です。私は、地域を歩いていろんな人と市民会議づくりや地域づくりなどに関わってきました。人々の熱い意志とパワーが地域から着実に変革のうねりと、環境革命への確かな手ごたえを感じます。

これからも「環境文化職人」として、糸を紡ぐ糸を紡ぐように行政・企業・市民をつなぎ、あくまで市民の目線で、地域づくりや環境計画、環境教育に関わり、地域に暮らす人たちの力をいただきながらお手伝いをしていくつもりです。しかし、残念ながら、私自身は環境革命や環境文化の成就した日々を、この目で確かめることは出来ないでしょうね。

文明・文化というのは、その時代ごとの民衆の選択です。ですから、いずれ「環境文化」と言わなくても、ごく普通の「生活文化」ですむ時代が目の前に来ていると確信しています。

20年後の社会をイメージしてみてください。無責任な発言を許していただければ、間違いなくそこには環境革命の成就した循環社会（エネルギー・食料・人間関係の地域内循環と地域主権社会）と、この国は4人に1人が65歳以上という超高齢化社会を生きています。それは、モノや財の所有という価値観から、3Rを基本にした、レンタル、リースなどを中心にした社会です。いかにモノを買わないか、浪費を軽蔑する時代になっていると思います。地球市民として「環境倫理」や他者を思いやる環境感性、環境知性のエコセンスを身につけ、多くのエシカル（倫理的）コンシューマーが生き生きと活動している社会です。

スタッフといっしょに

そしてなによりも子どもたちが希望にいる社会です。

望むらくは、この国の基層に流れる「あるものはあるがままにという無常観、仏教の輪廻の思想、身土不二や自然の中に生かされているという自然観、そこから生まれた自然との共存・共生、環境文化」を今一度実現してほしいものです。

岡 靖敏

●おか　やすとし＝1945年、岡山県生まれ。地球環境に健全な文明・文化の創造をめざして、社会運動と政策提言のできるNGO/NPOのグローバル環境文化研究所、環境文化創造集団GECを設立。昨年、有限責任中間法人あだーじょ、無限責任中間法人風水緑のまちづくりネット大阪を創設。都市と農山村の交流、過疎化、森林問題から始まり地球サミットに参加するなど地球環境問題に取り組み、地域の市民会議づくりに関わる。環境教育・環境計画、企画からエコイベントまで数多くプロデュース。ビオトープを取り入れた農業用水路の整備「水と緑のプロムナード」で建設省（当時）の〝手づくり郷土賞〟を受賞。共著に「地球環境のためにできること」など。

M・O・Hレポート2
〈文化「文化が支える日本の心」―③CSR〉

日本型CSR―進化への羅針盤

前浜 隆広
アストラゼネカ株式会社　コーポレートマネジメント統括部
CSRマネジメント部 部長

A compass to new,becoming it

社員も村も心待ちにする、アストラゼネカの"C−day"

日本ではCSRを、欧米からの「外圧」とする声も少なくないようです。その一方で、「三方よし」に代表されるような日本独自の企業理念、企業倫理を再評価し、日本の社会が求める「企業の社会的責任」について問い直し、日本型CSRの在り方を模索する動きも見られます。今後も日本のCSRが進化すると予測される中、外資系企業として日本独自のCSRを展開するアストラゼネカ株式会社（本社／大阪）のCSRマネジメント部長、前浜隆広さんにお話をお聞きしました。

■アストラゼネカ（株）東京支社（文京区後楽）
■2008年3月

C−dayパンフレット

◆アストラゼネカ

1913年にスウェーデンで設立されたアストラ社と、1926年に英国で誕生したＩＣＩ社を前身とするゼネカ社が1999年に合併して生まれた世界最大級の製薬会社。世界百カ国以上に事業拠点を持ち、従業員は6万7千人を超える。特に癌治療の領域では、トップメーカーとして知られる。日本では1950年代に市場参入し、2000年にアストラ社とゼネカ社の国内現地法人が合併し、アストラゼネカ(株)となった。代表取締役社長は加藤益弘氏。

世界企業ランキング500の頂点に立つ

先進国を源泉にＣＳＲの潮流が形成される中、ここ数年、ＣＳＲで世界的に知名度を上げているのが、イギリス・ロンドンに本社を置く巨大製薬会社、アストラゼネカだ。

ニューズウィーク日本版（発行／阪急コミュニケーションズ）が04年から、毎年6月頃に掲載する特集記事「世界企業ランキング５００」では、一昨年の2位に続き、昨年（07年版）1位にランキングされた（※同誌07年7・4号に掲載）。このランキングの特徴は、「財務力」＝〈収益性・成長性・安定性〉とともに「社会的責任（ＣＳＲ）」＝〈企業統治・従業員・社会・環境〉のデータを配点する集計分析法で、独自の順位付けが行われる点だ。財務力では複数の企業がアストラゼネカを上回るが、社会的責任で同社は最高得点をマークし、総合でトップに躍り出た。ＣＳＲの点数では、過去数年にわたり1位の座を維持している。

世界百カ国以上に事業拠点を持つアストラゼネカだが、グループ中枢も最近、特に注目しているのが、日本の現地法人であるアストラゼネカ株式会社のＣＳＲ活動だという。同社ＣＳＲマネジメント部の前浜隆広さんにお話をうかがった。

すべてのステークホルダーに“賞賛される企業”をめざして

かけ干し作業に汗を流す（静岡県松崎町）

「ＣＳＲという言葉の定義が難しいのですが、私たちは医療用医薬品メーカーですから、有効性・安全性が高くて、高品質な医薬品を、必要な時に必要とされる方々に、適正な価格でお届けしようというのがベースにあります。その上で、当社に関わるすべてのステークホルダー（※株主のみならず、顧客・従業員・地域住民・環境など）に対し、日頃の恩返しとして何かお役に立てることはないか。ステークホルダーが抱える問題の解決に少しでも貢献しながら、

一緒に成長していければと、そう考えています」

アストラゼネカグループ全体が『患者さんに貢献すること』を社会的なミッションとする中、同社は『賞賛されるリーディングカンパニーになること』をビジョンに定め、財務業績のみならず、製品、開発力、活動内容、社員の待遇、社会への影響・貢献など、あらゆる指標において、すべてのステークホルダーに〝賞賛される企業〟をめざす方針だ。

地域の方と社員の語らい（滋賀県高島市）

つまり、日々の事業活動すべてにCSRの考え方を投射する、ということだろう。それゆえに、あらためてCSRについて聞かれると、前浜さんいわく「普通に取り組んでいるだけ」となるのだが、同社が06年から年に一度、実施する「C―day」に、今、多方面から関心が寄せられている。

高齢化する村を応援する プロジェクト「C―day」が生まれるまで

同社がCSR活動に本腰を入れだしたのは、今から約2年前と、意外なほど最近のことだ。その責任者となった前浜さんは、CSR活動が、会社の一体感を育む求心力にもならないか、と考えた。

「00年にアストラジャパン(株)とゼネカ(株)が合併した時の国内の従業員は千人程度だったのですが、その後の急成長で3千人規模にまで膨れ上がりました。その影響で会社としての一体感が薄れていたと思います。ですから、3千人の社員が同じ日に、同じテーマでCSR活動に取り組もうと、それが私の最初の提案でした」

その次に、製薬会社に相応しく「人」と「人を支える環境」に貢献できるテーマを模索して、様々なNPOやボランティア組織の門戸を叩くうちに出会ったのが、「棚田」というテーマだった。

「私が言うのはおこがましいかもしれませんが、棚田は古くからの日本の財産です。それがあちこちで耕作放棄され、そこにお住いのお年寄りは、若い人が棚田に見切りをつけ、地元を離れることで、労働力を失うだけでなく、普段の会話すら減って、大変寂しい思いをしておられることを知りました。そういった地域に、3千人の社員が訪れ、どれだけお手伝いできるかはわかりませんが、一生懸命にがんばろう、応援しようという気持ちだけでも、お役に立てるのではと思ったんです」

前浜さんは、役員会で、営業日を一日割いて、社員全員が複数のグループに分散し、高齢化と過疎化にさらされている中山間地域を訪れ、地元を応援しようと、提案した。

「費用的な懸念もありました。営業日を一日割くことで、一日分の売上げが減ることにもなりかねません。その点は不安でしたが、でも、役員会に否定的な空気は一切なかったですね。それよりも、企業として社会的な責任を果たそうというムードが強く、加えて、棚田というテーマには価値があると、反対意見なしにゴーサインが出ました」

休日を充てずに、全社員が同一日に営業日をつぶしてCSR活動に取り組むことは、果たして日本の企業では可能だろうか。前浜さんは、「つながりを求めるのは人間として本能的なことだと思いますが、特に外資系企業では、社内の一体感を大切にするところが多いかもしれませんね」と語る。そんな社風とともに、大きく功を奏したのは、前浜さん自身が柔軟に、外部との接触を求めたことではないだろうか。

アストラゼネカのCSR活動は、特定非営利活動法人「棚田ネットワーク」と、東京ボランティア・市民活動センターとの連携のもと、「高齢化する村を応援するプロジェクト」として発足し、06年11月1日に、一回目の実施日となるC—dayを迎えた。

「来てくれた」「喜んでくれた」双方の思いが重なった日

当日、3千人の社員が複数のグループに分かれ、北は北海道・石狩郡から南は熊本県・水俣市まで全40カ所の中山間地域へ向かった。仕事の内容は、地元の窓口になってくれた行政や農業組合等の要請に応じて、棚田の修復作業や雑草の刈り取り、竹の伐採や清掃活動など、バリエーションは豊富だった。こうした〝野良仕事〟に、社員の皆さんの反応はどうだったのだろう。

「実際、社内では『どうして棚田なのか?』という声がなくはなかったんです。でも、社員個々の好奇心が、それを上回ったのと、『一緒にやろうや』という呼びかけで、全社員が参加してくれました。いざ現地では、皆の雰囲気がガラリと変わり、交流というものが、こんなに大事なことだとは、私自身の

予想をはるかに超えていました」

平均年齢は三十代前半という社員の若さも、地元のお年寄りにとって親しみやすかったのだろう。その日一日で交流は深まった。

「何人もの方が、若い社員の結婚を案じてくれたり、泥だらけになった着衣を見て、自分の息子や娘の服だ、と持って来てくださったというんです。見ず知らずの土地で親切にしてもらい、何

美しい棚田をバックに社員の笑顔があふれる（岡山県美咲町）

り自分たちが来たことを喜んでもらえたのが、みんなとても嬉しかったんだと思います。若い社員の反応を見ていると、本当にピュアだなと感じました」。

この日の終了後に行ったアンケートでは、受け入れ先となった地域の一〇〇%が、C―dayについて「とてもよかった」と回答した。

社員一人ひとりの"質"を高めるコラボレーション型のCSR

昨年の10月10日に実施した二回目のC―dayでは、移動にかかる時間を減らし、お手伝いの時間を増やすため、訪問先を50カ所に拡大。"地元の期待を裏切らない仕事をしたい"という社員の熱意は、並々ならぬものがあったという。

「自分の名前を覚えていてくれた、結婚はどうなったかと聞かれた、そういう人との"つながり"が、意欲を掻き立てるのでしょうし、何より人間として幅が広がりますよね」

そもそもC―dayの位置づけは、「普段お世話になっている地域、環境への貢献、それに加えて従業員に対し、一体感をもって楽しめることを提供しようというもので、いわば、この地域・環境・従業員に対しての企業からの恩返し」だ。これまで二回の活動を通じて、農村景観がよみがえったというレベルにまでは達していないが、それでも十枚、二十枚という単位で、棚田の回復は進んでいる。地元のお年寄りからは、C―dayの一日が、後々、村の語り草になったことや、それをきっかけに村の人同士、会話が増え、来年を心待ちにしていると、嬉しい声を聞くこともできた。

「C―dayによって、こちらが勉強させてもらうことは色々あるんです。視野が広がり、社会性が高まります。ほんの一例をご紹介しますと、おじいちゃん、おばあちゃんの中には、お医者様にかかっている人もいます。話をする中で、その人たちがどういう思いで薬を飲んでいるのか、薬はこういう目で捉えられているのかと、気づかされたという複数の報告がありました。C―dayを通して、企業人として狭くなりがちな視野が広がり、まさに社会の一員としての認識が高まっていると信じています」。

ボトムアップで法令遵守を肝に銘じるとは、こういうことなのかもしれない。日本型CSRの特徴の一つに、CSR＝企業倫理や法律を守ること、と解釈する傾向があるとされる。そしてそのために、社内教育を徹底し、トップダウンで法令遵守を学ばせる企業も多い。しかし〝質〟として、高いと感じるのはどちらだろう。一概には言えないが、社内教育の徹底以外にも、社会と積極的に交わりながら、社員一人ひとりのモラルや働き甲斐を高める、コラボレーション型のCSRがあることを、C―dayは物語っているのではないだろうか。

あえてリターンはといえば、会社の信頼度が上がったこと

今年10月に予定される三回目のC―dayは、安全対策が課題だという。

「毎年、鎌でケガをする社員が出てしまうんです。なぜかというと、ボランティアの専門家いわく、『おたくの会社は全員が、がんばりすぎる』そうです（笑）。確かに、お手伝いする仕事の量が少ないと社員から不平が出ますし、普段は近付かない危険な場所にも、草刈りの延長で、つい入ってしまうんです。地元からは、仕事よりも交流を楽しみにしているんだという声もありますし、贅沢な希望かもしれませんが、今年はもう少し〝遊び心〟も持ってほしいですね。でも一番、作業に一生懸命になるのは社長なんですが（笑）」

C―dayの旗印のもと、環境と地域と企業が一つの輪となり、その足並みの良さに、メディアからの取材はもとより、他の企業からヒアリングの要請が増えている。ターンはありましたか、という質問をよくお受けします。でも、名前はまだ時々、C―dayで訪れた村の人からも〝アキストゼネコ〟さんと言われますから（笑）。最初は、聞きなれない会社が、何を売ろうとしているのかと、不審がられた地域もあったんです。しかし、一回目と二回目を通じて、それと農林水産省と環境省から後援をいただくようになって、そうした感触はなくなりました。ですから、あえてリターンというなら、偉そうで

思いがけず地元の神事に参加することも
（宮崎県日南市）

すが、名前が売れたなどという軽い言葉でなく、信頼が得られたことです」。

C―dayが、会社のCSRを進化させる

地元からは、「もっと何度も来てほしい」という要望が寄せられている。それに応えるのは、会社として限界があるが、アイデアを検討して「棚田を守―dayのめざすところだ。

「インターネットや人のネットワークなど、活動を広げるためのお手伝いとして、何ができるかを考えています。また、社会貢献活動や田舎暮らし、農業等への関心が強まったという社員がいますから、個人の交流という点でも広がりを期待しています」

そうした広がりが、ゆくゆくは新たな起業家の誕生につながるかもしれない。そして、そうした人材の育成こそ、CSRの最たるもの、とする専門家の意見は多い。C―dayが、同社のCSRを今後、どう進化させるかが、楽しみでもある。

アジサイの咲く斜面で草刈をする社員（滋賀県米原市）

お揃いのスポーツタオルを手にする前浜氏

前浜 隆広

●まえはま たかひろ＝1960年大阪市生まれ。83年大阪大学経済学部卒業。同年製薬企業に入社、管理、営業、企画部門に携わる。その間に企業派遣として、93年神戸大学大学院経営学研究科修了。慶応大学大学院経営学研究科研究生および医療経済研究機構 調査部長を勤める。06年アストラゼネカに移り、現在、CSR経営の導入と普及を推進している。

●アストラゼネカ（株）＝本社所在地／〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-88 梅田スカイビルタワーイースト http://www.astrazeneca.co.jp/

ブライアン・ウィリアムズ
画家

画家・ブライアンさんが描く 原風景

The timeless landscape depicted by artist Brain Williams

―命をおくる、持続可能な場所として―

琵琶湖の湖畔で、棚田の傍らで、イーゼルに向かうブライアン・ウィリアムズさん（58）の姿を、テレビや新聞を通して目にしたことのある人も多いでしょう。ブライアンさんが描き続ける原風景は、過去へのノスタルジーではなく、未来へのサイン。持続可能の象徴でもあります。「都会にこそ“新原風景”をつくらなければ…」と語るブライアンさんに、お話をうかがいました。

■大津市伊香立 ブライアンさんのご自宅にて
■2008年3月4日

直線の苦手な風景画家が“ひと目惚れ”した滋賀の景観

日本に来て間もない頃は、京都にある神社仏閣を中心に描いていました。それが日本の文化だと思っていたからです。それから12年あまりが経過する中で、妻との縁にも恵まれ、京都を中心に人と仕事のネットワークができあがっていました。何かのきっかけで比叡山を訪れたのは、ちょうどその頃です。延暦寺から眼下を見渡すと、棚田があり里山があり、農村集落がある。その向こうに琵琶湖が広がり、さらにその奥には鈴鹿山脈や、晴れた日には伊吹山まで望むことができる。何千平方キロという広がりのある景観に、ひと目惚れしました。

絵を描くとき、私自身、直線の構図は硬い感じがして馴染みにくいのです。美しい曲線のある景観というのは、一つには水の存在が関わってきます。それと、日本は山地が多くて、広がりのある景色がそう沢山はありません。しかし、一人の風景画家として、心惹かれるのは、やはり広がりのある景色。京都の近くで私の求めている景観があるのは、滋賀県しかなかったということです。

周囲の環境と調和した“萱葺き農家”で日々の営みを

来日して間もない頃、田舎を訪れるうち、思いがけなく萱葺き農家が目に入りました。萱、木、土、石、紙、すべて自然の素材でできていて、硬い直線ではない。周囲の自然に溶け込んだような何ともいえない美しさに、またひと目惚れしました（笑）。私は絵描きですから、絵になる場所にいることが嬉しいのです。反対に、絵にならない場所にいると、心が縮むような気がします。

古民家を住みやすくリフォームした自宅

しかし、当時、棚田や里山を含め、萱葺き農家のある農村景観は、軒並み解体されてしまう時代でした。神社仏閣は保存されますが、農村景観は今あるうちに描かなければ失われてしまう。そんな思いで、様々な季節と天気の中、常に新しい顔を見せてくれる萱葺き農家を繰り返し描きました。しかし、ある日訪れると、既に解体されていることもあります。その跡に建てられたものを見ると、なんと味気なく貧弱なことか。

リビングにて

馴染みにくく、手作りの良さがないのです。新築費用を調べて、なおさら「もったない」と感じるようになりました。改築したほうが、きっともっと安上がりで素敵な家になる。それを実証したくて手に入れたのが今の住居です。それまでも絵筆で追っていた萱葺き農家だったのですが、建具を新調し、床板を張替え、システムキッチンにしてトイレも機能的にリフォームし、照明は室内のディスプレイを考えて、一般家庭の倍程度を設けました。それでもかかった費用は坪当たり約20万円です。当時の一戸建ての坪単価と比べれば、およそ半分の価格ではなかったでしょうか。その後、庭を造ったり増築したり、トータルすれば一戸建てと同じくらいの費用がかかりましたが、私としては「でも、できあがったた家を見て！」と言いたい（笑）。踊っているような梁の線を見るだけでも、心が癒されます。

自分は“異人”という感覚のメリット

私は宣教師だった両親の都合で、ペルーアンデスの高地で生まれ育ちました。父は英国ウェールズ生まれのアメリカ・アイオワ州育ち。母はドイツとプエルトリコのハーフで、戦後、アメリカに帰化しました。アメリカ人ではないアメリカ人の両親から生まれた私はいうなれば雑種で、見てくれは悪いけれどタフ（笑）。格好良く言えば、地球が故郷であり、文化的には南米・スペイン系とアメリカと日本、三つの水槽で泳ぐことのできる魚です。

でも、幼い頃から自分は異人だという感覚があります。故郷がないというのはちょっぴり寂しいことですが、同じ文化に属していても、たとえ家族で

あっても、人間が他者に伝えられることには限界があります。その限界の手前のところでは、誰も皆ひとり、孤独だと感じるのではないでしょうか。それがまた、慰めにもなるのですが…。

私にとって寂しさがデメリットだとしたら、メリットは視野の広さでしょう。人に会うにも、自分が何かを感じたり、表現するにも、自分の属性をあちらこちらに変えることができます。だから可能性がいっぱい（笑）。どこに行っても異人なのだから、良いと思ったものをピックアップすればいいというのが私の姿勢です。

「遅れたらお終いだ」の結果として…

私の立場で日本という国を考えるに、遡れば明治維新の頃、「遅れたらお終いだ」という概念ができあがってしまったのではないかと思います。当時の世界を見ると、特に全世界で、ヨーロッパ以外ではネパール・アフガニスタン・シャム王国（現在のタイ）を除いては、ほとんどが欧米の植民地と化していました。日本は「極東」という地理的なことや、アメリカとの関係、そして日本人の精神などいくつものファクターがあって、うまく植民地化を免れたといえます。でも、明治維新以降、世界と渡り合うために、遅れたら植民地化されるという強烈な危機感が生まれ、最初は軍事国家を、そして戦後は経済国家をめざしてきたと思います。そして、そのためならファミリーライフを犠牲にしてもやむを得ないという通念のまま、現在では子どもは子どもらしい時代を犠牲にして塾に通い、国は自然を犠牲にして経済活動を最優先し、という流れに至っているのではないでしょうか。自分たちの文化についても、世界に通用しないようでは価値がないと、切り捨てられてしまったように思います。しかし、今のアメリカを見てください。自分たちの文化を切り捨ててまで、お手本にすべきものがあると思いますか？

当たり前のものは「特別」のもの。視点を変えることが大切

失われた文化や自然に対する日本人の見方が、ここにきて少し変わってきたような印象を受けます。私が描く原風景を見て、「自分の国の美しさに改めて気づかされた」と言ってくれる人も少なくはありません。異人とは、そもそもそういう役割を担うものなのかな、という気もしますが、要は視点の違いです。視点を変えると、今まで当たり前だと思っていたことが、そうではないことに気づくのです。例えばお風呂に入るとき。かけ湯の習慣は欧米にはありません。まず桶がありませんし、仮にかけ湯をしたなら、下の階から水漏れの苦情が来ます（笑）。でも、衛生的で合理的な習慣です。そういうものがこの国には沢山あるのです。そして、当たり前のものは、特別のものでもあるのです。

愛猫のスーちゃん

曲面絵画の代表作

この「視点を変える」ということは、私にとって生きる上での基本姿勢の一つです。絵を描くために高所作業車を購入したのもそのためで、地上から約10メートルの高さで絵を描くうち、曲面絵画の（※写真参照）の発想が生まれました。

原風景とは“持続可能な安定型の生態系”である

原風景を描き続けることで、私が皆さんに伝えたいメッセージというのは、原風景とは何か、改めて考えてみる必要があるということです。

一般的な日本人は原風景というと、終戦後の日本の姿や、田舎のおじいちゃん、おばあちゃんを思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、単にそれをロマンチックだとか、ノスタルジーにとどめてしまうのは、私は違うと思います。

私が考える原風景の基本的なコンセプトは、「持続可能な安定型の生態系である」ということです。言い換えれば自然と調和し、持続性があるからこそ美しく見えるのです。私がなぜ、琵琶湖畔の原風景を描きたいと思ったか。それは自分が人間、動物として、ここでなら自分の命をおくっていける可能性があると思ったからです。食べ物も確保できる、家も建てられる、自然の脅威に晒されることもない。子どもをつくり、楽しく自分の人生を歩める。これは私に限ったことではなく、皆さんも原風景を見て、落ち着くなぁ、癒されるなぁと感じるのは、私と同じことを、自分でも気がつかない段階で本能的に悟っているからなのです。もちろん、生きる場所として見る以外に、他の美もありますが。

しかし、持続可能な安定型の生態系は、いまや南極や北極にまで行こうと、残されていません。そして、明治維新の頃や、終戦後に戻ることも不可能です。

では私たちに何ができるかといえば、それは「新原風景」をつくることです。しかもそれは、もっとも持続性が失われた場所、つまり都会でスタートしなければなりません。

都会の「文明」がつくりあげる、おかしな誤解

都会に暮らす人々は、「都会なしで田舎は成り立たない」と、変に誤解しているのではないでしょうか。実際はその真逆です。水、空気、食糧、建築材、生活に必要なものはすべて自然界から供給されます。そして、それらを消費した後の始末も、すべて自然の循環が担ってくれます。田舎は都会なしでも成り立ちますが、都会は田舎がなければ、すぐに崩壊してしまうでしょう。都会だけでも成り立つのは、お金儲けぐらいじゃないでしょうか。それを「文化」だと勘違いする人が多のですが、それは「文明」であって文化ではありません。本当の文化というのは、原風景的な安定型の生態系から生まれるものだと思います。例えば日本の食文化なら、多種多様な動植物で構成される自然界に支えられ、そこからインスピレーションを授かり、育まれてきたものなのです。

都会から生まれるものが、仮に文化であったとしても、それは持続性のある文化ではありません。常に更新され続ける刺激、と言ってしまえるのではないでしょうか。文化と文明の違いは、例えるなら栄養のある食べ物と旨味調味料の違いです。後者は刺激という点では素晴らしいのですが、栄養がありません。体に悪くはないとしても、決して良くもないのです。近代の文化ではない文明が、そうした刺激を生み続けているわけですが、同程度の刺激では段々と刺激にならなくなってきます。まさに中毒性があり、決して持続性のある現象とは言えないのです。

持続性が失われた都会でこそ、新原風景をつくらなければ

現在、約65億人といわれる世界人口の半分以上が都市部に暮らしています。このまま人口の都市化傾向が続けば、2050年までに人口の都市化率は80%近くにのぼるとも予測されています。

空中画家の誕生!

そうなると、私たち人間は想像もつかない環境悲劇に陥るのではないでしょうか。生活に必要なものが自然から供給できなくなる。人間の排泄物を自然が浄化できなくなる。このままでは未来は非常に暗いのです。遅かろうが早かろうが、いずれ循環型の社会に転換しなくてはならない現実を受け入れる時がくるのですから、早い方が利口に決まっています。その分、負担も辛さも軽くなるはずです。

だからこそ「新原風景」をつくりださなければ。新原風景をつくるとは、都会の中で食糧が供給できる、排泄物も処理できる、水も浄化できると、それぞれの「もの」のライフサイクル上で、常にどの段階でもそれなりに利活用しながら、循環型の社会を構築するということです。その点においては、原風景のコンセプトがきっと役に立つと思います。

例えば、高速道路の壁面やビルの屋上を緑化すれば、都会が美しくなります。それは人間味とともに、未来性のある景観であり、つまり新原風景とは、安定した持続性があるからこそ美しく見えるのです。いわば美しさとは、付加価値でもあります。そして、美しい景観は、新原風景化のサインであり、持続性のある社会に転換できたかどうかの一つの基準になると思います。

現代の社会で、原風景や新原風景的な発想は、自然を守るとか、田舎を残そうという方向で焦点が合わされます。しかし、それは根本的な間違いで、安定型の生態系や持続性が一番破壊された「都会」でこそ、実現されるべきなのです。

何十億年という時間単位の中で、保護されるべきは人間

埋め立て処理場から放射能廃棄物まで、永い永い時間が過ぎれば、いつかまた原風景となるでしょう。絶滅危惧種とされるトラだって、飼い猫がいつかトラに進化するかもしれません（笑）。だから私は、自然を案じてはいません。むしろ人間についてを案じます。地球という惑星が生まれて約50億年。そして太陽の膨張によって地球が消滅するかもしれないとされるときまで、およそ50億年あまりが残されていると聞きます。その時間単位の中で、破壊された環境が浄化され、新たな美しい動物が進化を遂げたとしても、果たしてそのときに人間が存在するのか？地球と比べれば、人間の一生はほんの一瞬です。しかし、ここまで進化した意識が失われてしまうのは、人間として惜しいと思います。だから、自然保護という言い方は間違いであって、正しくは人間保護です。そもそも自然を保護してあげようなんて人間の傲慢であり、人間は自然に保護され、養ってもらっていることに目覚めなければならないのです。

もっと大人になって、人類史上最大の冒険へ

これから私たち人間がやらなければならないことは、人類にとって前例のない革命であり、最大の冒険となるでしょう。この冒険の規模に比べたら、これまで人類史上最大の冒険とされてきた産業革命は、幼稚園児みたいなものです（笑）。人間は、今はまだティーン

エイジャーのあたりで、ワガママし放題に暴れまくり、資源を使い漁って、地球を荒らしたまま放置しています。そこからもっと大人にならなければ。生かされているということを知り、他の命を生かさなければ、自分も生きていくことはできない、ということを学ぶためには、少なくとも大学生くらいにはならないと（笑）。

最後にもう一度言います。原風景とは安定型の生態系であり、その景観には美が伴います。これから私たちがやらなければならないことは、原風景には戻れないとしても、新原風景にたどりつけるような持続型の社会に転換することです。そしてそれは、持続性が最も失われた都会で始めなければなりません。もしも都会の景観が、もっと柔らかで美しくなったならば、それは持続可能な社会になりつつあることの、一つのサインです。

もし、皆さんに「なるほど…」と思っていただけるなら、琵琶湖の原風景を描いてきた私の四半世紀も、無駄じゃない（笑）と思います。

ブライアン氏は屋根裏がお気に入り

Brian Williams

Sustainability = Beauty

●ブライアン・ウィリアムズ＝1950年、ペルー生まれのアメリカ人。66年、水彩画を始め、絵描きになろうと決める。68年、カリフォルニア大学で美術を専攻。72年、世界旅行で立ち寄った日本の自然と風土に魅せられ、そのまま定住を決意。風景画家として日本各地を写生旅行。78年、水彩画・油彩・版画を通して作品を発表し始める。以降、高島屋を中心に全国各地で個展を開催、現在に至る。84年、大津市伊香立の古い農家を改築し、京都より移住。写生旅行で訪れた国は30カ国を超え、世界旅行は現在も続く02年、滋賀県文化奨励賞受賞。07年、佐川美術館（守山市）にて「琵琶湖の原風景を求めて」展を開催。

現場絵描きの立場から、荒らされていく自然を憂い、自然保護、再生をメディアや講演等を通して訴える。「景観は環境の健康をはかるバロメーター」が信条。

初期の作品

アウグスブルグから

From Augsburg

〈ドイツだより―8〉

原　修子

ドイツの春は鮮やか。

冬の間ひっそりと耐えていた植物が一斉に目覚め、顔を出す。植物は、眠っていた時間を取り戻そうとするかのように、ぐんぐん、ぐんぐんとそれぞれの色で伸びて行く。

アウグスブルクの中心、旧市街の歩行者ゾーンの中に公営の市場がある。市民達の胃袋を賄うこの市場では、焼きたてのパン、新鮮な野菜や果物、そして魚類等が売られている。屋外の常設スタンドには、肉屋が入っているホール、そしてチーズ、ワイン、パスタ、オリーブ、各地の特産品店が集められているデリカテッセンホールがある。広場では週に三回程、近郊の農家の人々が自家製の野菜、卵等を売っている。

春の市場は楽しい。色鮮やかな季節の花、水仙の黄色が春の訪れを告げている。野菜も種類が増え、冬の単調さに別れを告げる。四月半ばを過ぎないと収穫が始まらないこの地方の名物であるホワイトアスパラガスは、早くも四月初めに店頭に顔をみせた。栽培方法の工夫、進歩も大きな役割を果たしてはいるであろうが、暖冬、地球温暖化の影響を見逃すことは出来ないであろう。

ここ数年、この市場で増えて来ているのが、バイオのお店。以前は有機野菜や、卵など、品物の種類も限られていた。現在は、有機栽培の葡萄を使って醸造したワイン、有機の牧草で育てられた牛の乳で作られたチーズやバター、あるいは有機栽培の小麦粉を原料としたパンやパスタ等のデリカテッセンと、種類も豊富である。初期には「高かろう、まずかろう」と言われていたことが信じられない。バイオ専門のスーパーマーケット、ディスカウントストアも市場に進出してきている。それとともに、地元や国内で生産された品物だけではなく、ヨーロッパ諸国、アフリカ、中近東やアジア、遠くは中南米やオーストラリア産のものも店頭に並ぶようになった。

この現象は少し高くても品質の良いもの、環境に優しい物を買おうとする意識の広がりが受け入れられ、そのような品物が求められていることを示している。しかしこれら専門店の品物は一般のスーパーマーケット等に較べると高い。だがこのようなバイオブームを

アウグスブルク市公営市場にある有機栽培の野菜果物店。

大型のスーパーマーケット、ディスカウントストアが見逃すはずがない。バイオ農法の食料品を販売するようになった現状には、農家と加工会社が契約を結び、供給源を確保する、というのが一般的だ。手ごろな価格で健康的なバイオ食料品が入手でき、一見とても良いことに思える。しかし問題になってくるのは、その契約相手が地元の生産業者だけではなく、外国にもあるということであろう。

ドイツで生産出来ないコーヒーなどは、輸入に頼らざるを得ないということはわかる。例えばドイツの典型的な野菜のキャベツや、果物といえば真っ先にあげられる林檎まで、わざわざ飛行機で運んで来る必要があるのであろうか。

バイオ野菜、有機栽培は、科学肥料、科学除草、除虫剤を使用しない、土壌汚染を防ぎ、自然に優しい。加工工程においても、環境に優しい技術，設備が要求されてきた。あわせて、自然に、環境に、そして健康に良いと言われて来た。

しかし輸送手段は、飛行機が使われ、長距離輸送トラックが活躍する。バイオ農法が求められる一方で、大気汚染、地球温暖化促進に一役かってしまっている。そのような矛盾が出始めているのも確かであろう。バイオ燃料の需要が増え、本来は食糧用であった玉蜀黍がエタノール燃料源として使用される。そして原料不足による物価の急騰。メキシコではタコスが一年間で四倍以上に値上がりしたという。今年に入ってからはハイチのデモもあった。

バイオ農法や、環境保護は大切なことであり、課題でもある。やらなければならないことであることに、反対する人はいないであろう。事態はダイナミックに動き、流動している。全てを予測、見通すことはできないが、方法を誤ったり、短期的展望で展開していったとき、地球的な配慮が忘れられないだろうか。気が付かなかった、うっかりしていました、ではすまない問題を抱えていることを、常に心にとどめたい。

〈追伸〉

気が付きませんでした、うっかりしていました、と言えば、前回の原稿でミスをおかしてしまいました。写真説明、環境ゾーンの始まりと終わり、反対になっていました。

「申し訳ございませんでした」

謹んでお詫びを申し上げますと共に訂正させて戴きます。

●はら　しゅうこ＝徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

W.M.ヴォーリズの「三方よし」人生

「Sanpou yoshi」the life

末永 國紀

ウィリアム・メレル・ヴォーリズという人は、近江八幡を拠点にキリスト教の伝道に生涯をかけ、ついに日本に帰化した、どの教会にも属さない自主独立のアメリカ出身の宣教師です。同時に、日本の近代建築に大きな足跡を遺した建築家であり、塗り薬メンソレータムの代理販売業を営む実業家でもあり、音楽・詩作・絵画に深い趣味を持つ教養人でした。風貌は、日本人のイメージする西洋人にピッタリ符合し、しかも品格があります。

これらの多面的な才能は、バラバラではなく、伝道活動を中心にヴォーリズのなかで関連付けられ、見事に統一されていました。伝道者としては、実に理想の人生であったといえます。

それなのに、彼の自叙伝のタイトルは、『失敗者の自叙伝』となっています。彼ほどの深い信仰をもつ人が、表面的な意味で自分の人生を振り返って、「失敗」だったと表現するはずはありません。その疑問は、この自叙伝を読んで、表題に込められた「失敗」の含意は、神に見守られ、その次にもっと旨くいくために神が与えた試練であった、ということが判って氷解しました。

伝道という一本の糸に貫かれながら、多面的な才能を開花させたマルチ人間ヴォーリズの芽は、すでにその青少年期に育まれていたといえます。ヴォーリズは、一八八〇年（明治一二）一〇月二八日にアメリカのカンザス州レブンワースで、キリスト教会の仕事を通じて結ばれた両親の長男に生まれました。母親は、ヴォーリズを妊娠しているとき、将来宣教師として外国伝道に献身してくれることを祈っていたそうです。

父親は、商業学校出身のビジネスマンであり、長年教会の会計係を勤め、赤字を黙って補填するようなもの静かな人物でした。家庭では、毎夜読書の時間をもうけ、子供達に文学作品を音読してやり、大きな感化を与えました。

ヴォーリズは、四歳の頃から従姉の影響で音楽に慣れ親しんでいました。また、鉛筆を持てば一時間以上も一人で絵を画いているような子供だったそうです。

彼は、幼い頃から自分で小遣いを稼

いでいました。小学校高学年のときには、早くも教会のオルガニストとして俸給をもらい、教材本の訪問販売を経験し、その後も文書整理箱の販売で抜群の才能を発揮し、高等学校時代は新聞配達係、コロラド大学生としては食堂の給仕や家庭教師等の様々なアルバイトに従事しました。とくに、大学の最後の二年間の学費と生活の完全な自給経験は、近江八幡での自主独立の伝道にとって貴重な体験となりました。

コロラド大学在学中にヴォーリズは趣味として建築の研究を続けていました。彼は、一九〇二年（明治三五）カナダのトロントで開催された学生伝道隊の大会に出席して霊感を受け、外国伝道を志願します。その目的は、「今まで宣教師の行ったことのない、今後も外国伝道団が手をつけそうもないような所へ行って、独立自給で神の国の細胞を作ってみたい」というところにありました。そうして選ばれたのが、パレスチナのガリラヤ丘陵に位置するナザレにたとえられた近江八幡だったのです。

ヴォーリズは大学を卒業し、一九〇五年に一九日かけて太平洋を渡り、二月二日に近江八幡の滋賀県立商業学校教師として赴任しました。赴任直後から独立自給の伝道活動を開始し、一九〇七年に伝道活動を理由に解職されたときには、二年間で三一人の受洗者を獲得していました。彼は、この成功に感激しています。なぜなら、他の宣教師によって当時の滋賀県は保守的で、受洗者など思いもよらない福音宣教の不毛地とみなされていたからです。

ヴォーリズが、自身でさえ予期せぬ伝道成果をあげ得た理由の一つは、生徒とあまり年齢差のない若き教師として、近江八幡へ永住の決意で赴任したことが大きかったと思います。もう一つは、実際に住んでみて、琵琶湖を抱えた近江八幡の美しい風景に愛着をもつようになったこともあるでしょう。

教師解職直後から、内外からの物質的精神的援助が寄せられ、とくに建築の仕事では名古屋・神戸・京都・長崎・東京や北海道からまで注文が来るようになりました。一九一〇年の欧州旅行では、メンソレータム社の創設者A・A・ハイドに出会う機会を得ました。近江ミッション（近江兄弟社）のための揺るぎない経済的基盤ができたのです。

一九一九（大正八年）には華族の一柳満喜子と結婚し、個人的にも安定した家庭を営むようになりました。

太平洋戦争中は、言い難い苦難の生活だった思います。しかし、八三年の生涯を通してみると、天職といえる使命感に燃えた仕事に従事し、気に入った風光明媚の土地に住み、好伴侶を得て、充実した人生であったといえるでしょう。いうなれば、「失敗」の積み重ねで築かれた「三方よし」人生だったと思います。

近江商人に学べ

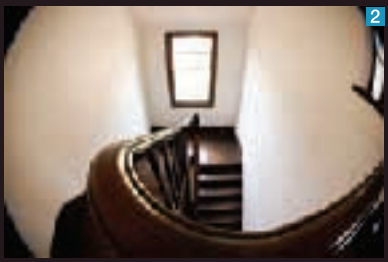
末永國紀

●すえながくにとし＝1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。（財）近江商人郷土館館長。
著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）

ヴォーリズさんの建物

A beautiful building & Beautiful way of life

（文と写真）
辻村 耕司
フォトグラファー



1.旧忠田邸(1937竣工)の玄関。ベンチに座ると靴の脱ぎ履きが楽にできます。　2.ヴォーリズさんの建築で特徴的な階段。段差が低く昇り降りがしやすい。　3.リビングには暖炉が、窓は大きくとられ庭へと開かれる。暖かな光があふれる空間に穏やかな時間が流れる。　4.いま見ても古びていない佇まい。

4

1.旧忠田邸２階には日本人の生活にあわせ和室が。2.アールがとられた空間もヴォーリズさんの特徴。階段の下には収納が作られ機能的。3.真鍮のドアノブが歴史を語ります。

【出会い】

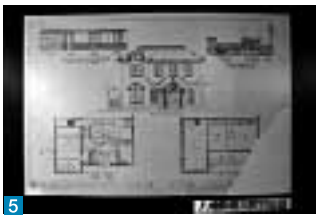
私の通っていた小学校は木造の校舎。階段の手すりはぴかぴかでした。後年は実家を離れていたので、気づいた時には新しい校舎になっていました。後にヴォーリズ建築事務所の設計と知りました。大学もヴォーリズさんの設計した関西学院大学でした。芝生を取り囲む校舎、今もその美しさは変わりません。在学中は、この校舎と近江八幡は結びつかなかったのですが…。

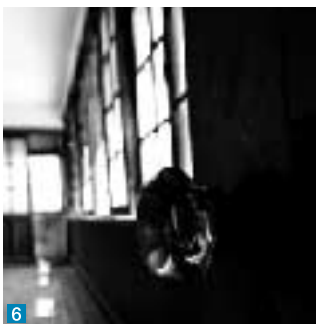
【再会】

滋賀に戻りフリーランスで仕事を始めた10数年前、「湖国と文化」の取材で吉田邸（最初期のヴォーリズ設計の住宅）を訪れました。とても80年を経過しているとは思えなかった。居間のソファに腰掛けると、とても落ち着く。使いやすく考えられた間取り、階段の登りやすさには感動しました。

「台所と寝室があれば家です。けれども、家とホームは違います。居間ができて初めてホームの資格になる」（「吾家の設計」１９２３年ヴォーリズ）

文化の伝承の場となる家庭の大切さを





4.旧八幡郵便局内に掲示された「一粒の会」の紹介。5.旧八幡郵便局の設計図。6.紫水晶のドアノブはアメリカから輸入された。7.特徴のあるファサードは街のランドマークとなっている。

感じます。

【たねや日牟禮カフェ(旧忠田邸)】

改修され、カフェの特別室となっています。明るいリビングと落ち着きのある2Fの和室、それぞれ趣の違う空間が楽しめます。

【NPO法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会】

ヴォーリズさんの話を伺うために旧八幡郵便局へ。玄関周りはきれいに修復されています。天窓から射す柔らかな光の中、一粒の会メンバーの太田さんと橋さんにお会いしました。

「ヴォーリズさんは光を取り入れるのがうまいんですよ」と太田さん。玄関側天井近くの連窓からは午後の陽射しが入り、奥の部屋まで明るくするとのこと。

「ヴォーリズさんは建築に関してエリート教育を受けたわけではありません。彼のやさしさが、家族の空間づくり、緩やかな階段といった誰もが住みやすい設計を生み出し、建物の表情をかたち作ったのでしょう。この八幡郵便局も人が居心地よく健康に過ごせる空間となりました」

1

2

3

1.3.橋さんは「一粒の会」の活動で伴侶と出会い近江八幡に住むこととなった。2.応接室へつづくアーチ型の通路。

4.2階部分は、これから修復。5.壁の構造がよく分かる。内部を空気が通り抜ける。6.天窓からの光が柔らかく室内を照らす。7.ヴォーリズさんはスパニッシュミッションスタイルを日本に上手に取り入れた最初の人と話す太田さん。

一粒の会は旧八幡郵便局の再生と、ヴォーリズの語りかけるものを広く県内外に伝えるために設立されました。当初は天井に穴があき、雨漏りがし、シロアリによる被害が多かった建物を有志によるボランティア活動で清掃し、修復を続けました。まだまだ修復は継続中、人手も費用もかかります。

「継続は力です。全国的な広がりとなっています。人との出会いは大切です」と、太田さん。

橋さんの結婚相手は、この会のメンバーの一人。思い出ある八幡郵便局で式を挙げました。橋さんに尋ねました。活動を続ける秘訣は？

「無理をしないことです」

辻井耕司

●つじむら　こうじ＝1957年滋賀県生まれ。膳所高校卒、関西学院大学中退後、独学で写真の道へ。『湖国再発見』をテーマに滋賀の風物を取り続ける。出版社や企業からの依頼が多く、写真掲載出版物は多数。

企業が地域から学ぶこと

companys learn from rocal and regional cultures

弘中 史子
滋賀大学経済学部 企業経営学科 准教授

1.はじめに

企業には、立地する場所・地域があります。そして、そこにはそれぞれ風土・歴史が根づいています。企業はこの地域という存在から、どのような影響を受けているのでしょうか。滋賀県下の二社の事例を交えながら、見ていきましょう。

2.地域の歴史から学ぶこと

歴史の面で、滋賀県下の企業に大きな影響を与えているのは、近江商人の存在でしょう。

近江商人の商売における理念の一つとしてよく知られているのが、「売り手よし、買い手よし、世間よし」を表す「三方よし」です。ところで、この「三方よし」という言葉は、近年になって、近江商人の到達した普遍的な経営理念を簡潔に示すためシンボル的に用いられるようになった表現です。末永國紀氏によれば、その直接の原典は、江戸時代中期の近江商人である中村治兵衛が養嗣子に認めた書き置きの中の一節であるといいます。

こうした近江商人の思想は、経営理念というかたちで、企業のマネジメントに生かされています。菓子製造・販売を主として手がけるたねやグループ（滋賀県愛知郡愛荘町）には、経営理念や基本方針をまとめた「末廣正統苑（すえひろしょうとうえん）」という冊子が存在します。そこには、現在グループを束ねる山本徳次氏が先代の脩次氏から教わったことと、近江商人の遺訓が同社独自の体系で整理され、文章にまとめられています。この冊子は社員全員に配付され、新人研修時や会議の場、日常業務の中で折に触れて利用されるそうです。まさに、同社においてバイブルのような役割を果たしているのです。

3.企業が風土から学ぶこと

滋賀といえば、多くの人が思い浮かべるのが日本最大の湖、びわ湖です。その周りには、肥沃な土地、川、里山など豊かな自然が広がっています。こうした環境に立地しているため、滋賀県には環境保全に対する意識の高い企業

が多いようです。

株式会社安土建築工房（滋賀県蒲生郡）は、自然素材と伝統工法にこだわった木造住宅・店舗の設計・施工を手がけています。同社は、自社内でのゼロ・エミッションを構想し、実践に向けて努力しています。そのビジネスモデルは、(一)山で育てた木を使って家をつくる、(二)その際に発生した端材を、おもちゃや家具などのクラフトとして再利用する、(三)さらに、家を建てた顧客とともに、住宅の建設で伐った分だけの苗木を植え、(四)百年後に再び材木として使えるように育成する、というものです。つまりビジネス・プロセスの中でゴミを発生させず、山林の環境もよみがえらせることができるモデルになっているのです。

安土建築工房のゼロエミッションプロジェクト

4. 地域から学ぶことで生まれる経営効果

以上、企業が滋賀県という地域から何を学んでいるかを、二社の事例から見てきましたが、こうした学びは、企業経営にさらに3つの効果をもたらしています。

第一が、グローバル志向とローカル志向の両立です。近江商人は、大きな産業がなかった地域を本拠としながら、江戸時代に全国にビジネスを展開していました。グローバルという言葉を「広域的」という意味で用いるのであれば、彼らはまさにグローバル化していたのです。一方で彼らは本拠地である近江や、出店先の地域において、橋や道路を建設したり、飢饉時には寄付をしたりするなど、地域への愛着を持っていたことでも知られています。つまり、グローバル志向とローカル志向がうまくバランスしていました。

たねやグループで「末廣正統苑」が完成したのは、東京にある三越百貨店日本橋店への出店の直前でした。それまで同社は順調に売上を増加させていましたが、まだ県内のみでの展開でした。近江商人からの学びは、全国展開の一歩を踏み出す際に、大きな勇気を与えたそうです。

第二が企業戦略における原点です。滋賀県の企業では、経営戦略を練る際に、近江商人や自然環境といった原点にたち戻って考えることができます。安土建築工房は、創業当初からゼロ・エミッションを掲げていたわけではありませんでした。しかし「三方よし」を意識し、自然素材にこだわった建築をしていくうちに、このビジネスモデルにいきついたのです。

たねや農場

第三に、企業と生活者との接点が生まれてきます。近江商人の影響を受け、豊かな自然環境に囲まれ、地域から日々学ぶことで、そこに住む生活者にも自然と目が向くようになるのではないでしょうか。

たとえば、安土建築工房では、地域の福祉共同作業所と連携し、自社の端材を使ったおもちゃづくり事業を活かして、障がい者の仕事確保に貢献しようと努力しています。また、地元の中学生や高校生を就業体験のため受け入れたり、親子の木工教室を開催したりしています。たねやグループでは、地域の農業活性化に貢献したいという意欲が芽生えています。同社では菓子の原材料を生産するために農業生産法人を設立していますが、そこでは地元農家の人々から協力を得るなど交流を進めています。

5.むすび

このように滋賀県内では地域からの学びを活かして経営のスタイルを確立する企業がみられます。

特に、ヒト・モノ・カネといった経営資源が稀少な中小企業にとって、身近でかつ無償で学ぶことができる地域の存在は、経営において大きな支えとなるはずです。また地域から学ぶ企業が増えれば、域内での企業同士や生活者との交流も盛んになるでしょう。

このように、企業が地域から学ぶことは、大きな可能性を持っているのです。

楽しむ弘中史子

●ひろなか ちかこ＝滋賀大学経済学部で教育・研究に携わる。専門は中小企業論。近江の人々・自然に魅力を感じるにつれ、地域にねざした中小企業経営のあり方に関心をもつ。

M・O・H レポート6
〈文化「文化が支える日本の心」―⑦古に学ぶ〉

先人の”良識“を今に伝える

横関 隆幸さん
木之本町サンデー林業グループ会長

Good sense

「實語教、童子教」を復刻

木之本町のJR駅近くに、ひっそりとたたずむ図書館があります。名前は財団法人「江北（こうほく）図書館」です。

明治40年（1907）の開館以来、財政上の困難により、幾度となく運営の危機にさらされながらも、昨年、創立100周年の大きな節目の時を迎えました。先人たちの知の遺産である、この図書館を愛する横関さんが、古き日本の教えを紐解き、復刻しました。

■江北図書館／木之本町木之本
■2008年3月

復刻された童子教（右）と實語教（左）

山高きが故に貴からず…

木之本町大音に住む横関隆幸さん(62)は、20数年来の江北図書館の利用者だ。その昔、館内で『農の哲人 二宮金次郎伝』を手にし、江戸期の寺子屋で、教科書として最も広く用いられた『實語教 童子教』の存在を知った。この書は儒教色が強く、作者は不詳だが、一説には弘法大師の作著ともされる。小学校の校庭で見かける金次郎の銅像が、薪を背負いながら一心に読みふけっているのも、この書だとされる。

横関さんは、實語教の出だしの一節、「山高きが故に貴からず 樹有るを以って貴しとなす」が、なぜか心に深く刻まれたのだという。熊本生まれの横関さんは、昭和51年に、奥さんの実家がある木之本町に移り住んだ。こちらでは、団体職員として働く傍ら、最初は好奇心で、山仕事を手伝うようになり、山の木には特別の思い入れがあった。

「その当時は今よりもっと積雪量が多くて、植林後、20年は経過したような山の木が、倒れてしまうことも珍しくなかったんです。倒れた木をおこしたり、枝打ちに専念するうち、山の木を育てるということは、実際の作業以上に、何か深い意味合いがあるのではないかと思うようになりました。いってみれば、山仕事に携わる人間にとっては、生き方というか、人生の機微そのものが込められているような、そんな気がしたんです」

人の手により育てられた木々が繁っているからこそ、山は貴い――。それは横関さんにとって、励みになる言葉であった。

その後、館の蔵書の中に、明治44年に発行された『日本教育文庫教科書篇』(同文館)を見つけ出し、『實語教 童子教』の全文を目にする機会を得た。

「同じ教科書として用いられた『論語』などは、容易に入手することができますが、『實語教 童子教』は、探してもなかなか見つからなかったんです。で

風格ある江北図書館

「私は多くの人に伝えていきたい」横関氏

日本教育文庫教科書篇

横関氏の訳ノート

すから、やっと出会えたという感じでした(笑)」

ノートに全文を書き写し、その下に自力で読み下し文を書き加えた。読みづらい漢字が多く、なかなか苦労したという。そのノートは、当時、まだ小学生だった我が子に読み聞かせをしたり、自身の研究材料として、長らく活用してきた。

歴史から学ぶ自然への畏敬の念と、植林の必要性

「文明の発祥地には、大河とともに、必ず山があります。しかし、山の木を切り尽くすと、文明は必ず衰退していきます。日本でも、京都や奈良で都を造営するため、大量の木が伐採されましたが、山から木が失われることで、洪水などの天災が頻繁に発生しました。そのため、自然を敬う気持ちが醸成する中で、おのずと植林が行われるようになったのではないでしょうか」

日本では戦後、国の方針として全国的に杉の植林が行われ、それが、現在の花粉症の原因であると、一概的に植林を批判する声もある。しかし横関さんは、「いくつかの課題はあるものの、植林自体は、いつか必ず役に立つ日がくる」と信じている。必要なのは、植樹種などの植林計画とともに、間伐や枝打ちなどの適正な管理であり、そのために横関さんは、本誌17号で掲載した、清水陽介さんが率いる「どっぽ村」の活動にも加わった。

「どっぽ村を通じて、人が集まる機会に、山仕事の楽しさを伝えられればと思うんです。活動の一環として、"枝打ち隊"を編成し、枯れ枝を打つ作業を体験してもらいたいと思っています。この取り組みが、いずれ全国に広がれば面白いんじゃないかと、ひそかに期待しているのですが(笑)」

本に囲まれて時を忘れる、豊かなひととき

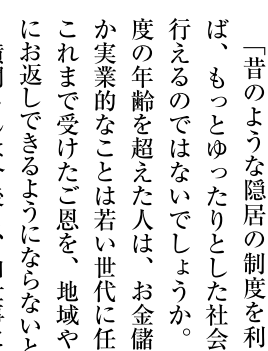
“ご隠居”のような立場で、社会教育を

「實語教も童子教も、人間として有るべき姿を説いているんです。両親への感謝、自然への畏敬の念、そして人間は学んでいかなければならないということ。勉強で一番大切なのは、自分が知りたいと思う気持ちなんです。そのことさえ教えてあげれば、子どもは自分の進むべき道を、おのずと見つけるのではないでしょうか」

内から湧き起こる知的欲求が、何より大切な学習動機、成長動機であることを、横関さんは、ご隠居さんのような立場で、地域の子どもたちに伝えていきたいそうだ。

「昔のような隠居の制度を利用すれば、もっとゆったりとした社会教育が行えるのではないでしょうか。ある程度の年齢を超えた人は、お金儲けだとか実業的なことは若い世代に任せて、これまで受けたご恩を、地域や子どもにお返しできるようにならないと…」

横関さんは今後も、山仕事に精を出し、請われれば『實語教 童子教』に書かれた、先人の智恵の語り部として、地域に恩返しを続けるつもりだ。



●よこぜき たかゆき＝昭和21年、熊本県生まれ。長崎県の大学を卒業後、大阪の造船所に就職。昭和50年に結婚。その翌年、木之本町へ移住する。団体職員として勤めながら、平成3年からは滋賀県の林業ボランティアとして活躍。現在、木之本町サンデー林業グループ会長。真拳道青嵐会木之本支部代表。

ふれあい
第九回
『 赤いふうせん 』

中井 二三雄

♪赤いふうせん手に持って　走ったりころんだり～。

カラフルな遊園地に、お母さんの大好きな歌が流れていました。

ふうせん売り場に来ると、赤いふうせんにするか、青いふうせんにしょうか、兄と妹は迷いました。

「ぼくは赤だ」

「わたしは青」

「おにいちゃん、女の子みたいだ」

「おまえこそ。青は男の子の色なのに」

「おかしいな」

「かっこ悪う」

二人でブツクサ言っていると、お母さんが言いました。

「男の子は青か黒、女の子は赤かピンクなんて決まってないのよ。二人ともステキなふうせんだわ。よく似合ってるわよ」

「そうかな」

「お母さん、買ってくれてありがとう」

「自分の好きな色を選んでよかったわね」

♪赤い（青い）ふうせん　手に持って～

お母さんは、赤と青、二つの歌を交互にうたってくれました。

●なかい ふみお＝1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年から著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

M・O・H レポート7
〈文化「文化が支える日本の心」―⑧〉

【温故（おんこ）】―いにしえに学ぶ

中江 彰
高島市教育委員会事務局 藤樹研究相談役

Taking a lesson from the past

「良知の学」中江藤樹のふるさと―高島

高島市では今年、郷土が輩出した偉人・中江藤樹の生誕から400年を迎えることを記念して、「中江藤樹生誕400年祭」が開催されています。4月30日には、藤樹が毎日拝誦した「孝経」の石碑が建立され、その除幕式が行われました。

「良知の学」や「孝の教え」など、今も地元では藤樹の思想が時代を超えて学び継がれます。生きることと、学ぶことが一つになる喜びを、藤樹の思想が気づかせてくれるからかもしれません。

■良知館／高島市安曇川町上小川
■2008年4月30日

上左から漫画「中江藤樹」、井上氏推薦「藤樹先生」、市民劇「藤の樹と風と」
下左から中江氏著作「中江藤樹のことば」、「かながき孝経」

色あせることのない藤樹の存在

旧安曇川町の人々が中心となり中江藤樹の顕彰活動を続けてきた「藤樹会」は、平成17年1月1日の高島市発足にあわせ、全市的な「高島藤樹会」へと発展した。

現在、高島市教育委員会事務局において、藤樹研究相談役という肩書きを持つ中江彰さんは、藤樹神社の近くに住み、藤樹の存在を肌で感じてきた一人だ。

中江「偶然にも同姓ですが、藤樹先生との血縁はないようです（笑）」

藤樹神社を中心に、中江藤樹記念館や、その墓所である玉林寺、藤樹書院などが近接し、藤樹が生きた時代、小川村と呼ばれた集落（現・高島市安曇川町上小川）は、藤樹の面影を失うことなく、むしろその陰影をますます濃いものにしながら、今年、藤樹生誕から400年の時を迎えた。

中江「藤樹先生は、数えの41歳でお亡くなりになられました。没後から約360年が過ぎても名が残るというのは、やはりそこに何かがあるからです。わずか40年あまりですが、藤樹先生の生涯には、50近くの逸話が残されています。そのうち多くは、藤樹先生が村人とともに生きられた中、生まれたもので、そこから藤樹先生の教えや人物像が鮮やかに浮かび上がってくるような気がしますね」

MOH通信の執筆者である井上昌幸先生も、中江藤樹の教えを敬愛をする一人だが、藤樹の実像に迫ろうとする地元の活動には、高い期待と関心を寄せている。

井上「藤樹先生は武士と村人のどちらにも、学問を教えられました。中江さんをはじめ、地元の皆さんは、そのうち村人に対して、藤樹先生がいかに教えを説かれたか。そして、その教えがどうのように広まっていったかを中心に調査・研究されている点が、特徴だと思います。地域の伝承という側面からも、中江藤樹という人物に光を当てることは、非常に大事なことではないでしょうか」

藤樹の平等思想と、村人に説いた"人としての道"

周知のように、藤樹は日本の陽明学の開祖である。私塾・藤樹書院では身分を分け隔てることなく、門人には陽明学を説き、孝経と四書（大学・中庸・論語・孟子）を教え、村人には「人としての道」を教えた。この平等思想は、儒学者・中江藤樹をもっとも特徴づけるものとされる。

中江「陽明学という学問は当時の武士をはじめ、為政者にとってふさわしい学問でした。しかし、身を修めて国を治めるというだけが、藤樹先生の教えではなかったことでしょう。村人にもその身にふさわしい学問があり、それこそが"人としての道"の教えであったと思います」

藤樹の教えを代表するものとして「致良知（ちりょうち）」という言葉を引くことが多い。しかし、中江さん、井上先生ともに「良知に致る道すじ」として説かれた「五事（ごじ）を正す」こそ、一番大切な教えではないかと、意見が一致している。

五事とは貌・言・視・聴・思を指す。つまり「顔つき・言葉づかい・目つき・聴き方・思い」だ。なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ眼でものごとを見つめ、相手の本当の気持ちを聴くようにし、真心をもって相手を思う。藤樹は、日常の中でそのようにできていれば、良知に致っていると説いた。

井上「庶民への教えとして、最もふさわしいものではないでしょうか。決して難しい言葉ではありません。ただ、実践は難しく、私もそれを痛感しています（笑）。これが日常の中で行えるようになれば、私は、人間というのは、なかなか立派な生き物だと思いますね」

中江「五事の中で一番大切なのは、『思う』ということ。常に『心』なんですよ。心が言葉を、つまり言葉というのは心から発するもので、藤樹先生曰く、『あなたの心は言葉でわかる』と。ですから、自分に善の心、良き心であろうという気持ちがあれば、行いも言葉づかいも、あらゆることが善に通じる。そして、それが相手に伝わるという教えなのです」

学は良知に致るより外はなく候――読み書きに励む地元っ子

こうした教えは藤樹が独自に考え、広めたものではない。藤樹の最大の偉業は、"実践の学問"ともされる陽明学の教えを、その時代の人々にいかにわかりやすい言葉で説いたかだ。そして、それに習おうとする姿勢が、今も地元で受け継がれている。

藤樹の教えのメッセンジャーとして中江さんは、『中江藤樹のことば』と題した一冊を平成18年に出版した。この本は子どもたちにも読みやすい大きな文字と振り仮名付きの素読用で、藤樹の著書や書簡から60の言葉が選り抜かれている。

中江「古の言葉であっても、現代人の心に鋭く響く言葉があります。それをどうやって皆さんに伝えるかという作業、それが大事だと思うんです。」

中江藤樹記念館では、夏休みに「了佐てらこや小学校」を開校し、参加した子どもたちが、論語などの素読や習字に励む光景も、毎年の風物詩となりつつあるそうだ。

中江氏（左）と井上氏（右）話題が尽きない

中江「子どもたちはすぐに丸暗記してしまいます。もちろん意味は二の次ですが、いつか歳をとった時、段々と意味がわかってくる。それでいいんだと思います（笑）」

（上）(右)藤樹書院　（左）書院の中で素読が行われる

道の駅・藤樹の里

（上）中江藤樹記念館
(下)昔の復元模型

教えを映す上小川の集落景観

井上「五事を正すということを教えられたから、この地元はそういう雰囲気なんですよ」

井上先生の言葉どおり、上小川の集落景観には特筆すべきものがある。美しく整った家並みや、集落内を流れる清らかな小川。その流れには、色鮮やかな鯉が泳ぐ。

藤樹書院に隣接する「良知館」は、いわば、町のゲストハウスだ。開館時間中は地元の女性ボランティアスタッフが常駐し、丁寧に対応してくれる。また、藤樹に関する資料や書籍をはじめ、ちょっとした土産物も揃っている。こうした品々の代金は、そばに置かれた竹筒に入れる仕組みだ。これは、藤樹が生計を立てるために営んだ酒屋で、村人たちは講義中の藤樹の邪魔をせぬよう、誰の目がなくても、きちんと竹筒に代金を支払っていったことにちなんだものだろう。

五事が記された扇子（扇骨は高島の名産）

この方が、中江藤樹先生

市民劇「藤の樹と風と―中江藤樹物語」は9月21日に上演

この地元を主な舞台として、現在、『中江藤樹生誕400年祭』が開催中だ（※今年9月28日まで開催）。期間中、藤樹書院では7回の講座が開講されるほか、藤樹の里ふれあいウォークや、講談「中江藤樹物語」の公演など多彩な催しが行われる。なかでも、9月21日に上演される藤樹市民劇「藤の樹と風と―中江藤樹物語」は、藤樹の幼少から生涯を閉じるまでを、市民らが熱演するメインイベントだ。劇中には藤樹の高弟である大野了佐や熊沢蕃山も登場し、藤樹から教えを受ける場面も盛り込まれている。

生誕400年祭をきっかけに中江さんたち地元の人々は、中江藤樹の名前をより多くの人に知ってもらうことを、一番に目指している。

除幕式にて

中江「まずは名前を知ってもらうことが大事だと思います。そこから先、5年、10年と次の段階で、藤樹先生の教えを広めていければと考えています」

戦前、中江藤樹の名前と親孝行の逸話などは、国定教科書（尋常科の国語や修身）の中に幾度となく登場した。しかし、それが軍国主義等と結びつけられてしまったため、戦後教育に藤樹の名が再び登場することはなかった。そんな中、藤樹の地元にある青柳（あおやぎ）小学校だけは歴代校長の判断により、地元が輩出した偉人中江藤樹を尊んで学び、今も『藤樹先生』の副読本が3年生から6年生の学習に使用されている。

藤樹先生と母堂と子息が眠る墓所

内村鑑三が選んだ「代表的日本人」

戦後教育から消し去られた中江藤樹の名前を、若い世代はほとんど知らない。しかし、1908年に出版された内村鑑三の名著『代表的日本人』で、内村が西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人を代表的日本人に選んだように、日本思想の大系や系譜の上で、藤樹の名は欠かすことはできない。余談だが、『代表的日本人』は岡倉天心の『茶の本』、新渡戸稲造の『武士道』とともに、日本人が英語で刊行した三大名著とされる（※原著のタイトル『Japan and the Japanese』）。

内村は序文の最後を次のように結んでいる。「――日本を救うに日本人の力をもってせよ」。今の時代の空気にも、ぴたりと当てはまるような言葉だ。生誕から400年、時代は中江藤樹という人物を求めているのではないだろうか。

「産経」石碑、中江藤樹自筆で刻印

中江 彰

●なかえ　あきら＝1953年大阪府堺市生まれ。1975年仏教大学文学部史学科卒業（東洋史学）。同大学歴史研究所研修員を経て安曇川町教育委員会に就職。近江聖人中江藤樹記念館館長（2004～2008年）。主な著書／『中江藤樹のことば』2006年（登龍館）、『中江藤樹　人生百訓』2007年（致知出版社）など。

●中江藤樹生誕400年祭のお問い合わせ先／藤樹先生生誕400年祭実行委員会事務局

心温まる物語

晩年成長期

A heart warming story “An adult grows up too”

今関 信子

イラスト：千田 満

娘が第二子を出産して、我々夫婦の落ち着いた生活は一変した。二歳になったばかりの孫が加わったのである。

視聴するテレビも、幼い子ども向けの番組が選局される。わたしが子育てをした三十年前とさほど変わりのない「おかあさんといっしょ」や「いないいないばあ」、かなり斬新な切り込みの「五時からクインテット」や「にほんごであそぼう」などを、孫の反応を楽しみながら見ることになった。

その一つに「ピタゴラスイッチ」という番組があった。ボールが転がり始める。段差があって、コトンと落ちて、方向を転換して転がっていくと、オモチャの自動車にぶつかる。自動車が走り出して、立てかけてあった割り箸に当たって、……、……、さいごに鐘をチーンと鳴らして止まる。さまざまなバリエーションがあって、意外な物が意外な動き方をして、次の動きを作っていくのが面白い。

わたしは、子どもの頃、縁日でビー玉が、交互に組まれた坂道を、方向を変えながら、後から後から転がり落ちていく

のを見た記憶がある。そのうちビー玉はカプセルに入り、カプセルはでんぐり返しをするようになった。原理は同じでも、ただ転がるだけでなくなったオモチャに、ひどく惹かれていた。

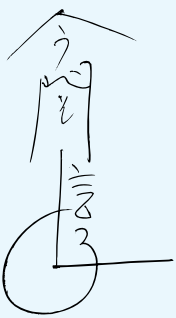
どうやらこの遊びを総称して、「ころころ」と言うらしい。連鎖の楽しさや意外な展開を楽しめるので、大人の愛好者もいると聞いた。

「ころころ」は、我が家でもブームになった。さっそくビー玉を買ってきた。転がりやすい所を探して、孫は家の中を物色し始めた。しきい、畳の縁を見つける。カンの蓋、丸盆などで、傾けると転がる楽しみを見つけ出す。そのうち、階段の上から転がることを発見した。高低が出て遊びに膨らみが出た。次は何をみつけるのか、私達大人も結構はまった。

が、子育ては、良いところばかりではない。機嫌を損ねると、二歳の子がものすごい抵抗勢力となる。くたくたになるほどだ。甲高い声が耳について離れないこともある。

ある日、孫が風呂に入るのを嫌がった。風呂に入れるのは、夫の係りになっている。いつもなら、喜んで入るのに、「入らないよ」の一点張りで動かない。娘が説得を試みるがうまくいかない。「じゃあ、さあ…」夫が孫の耳にひそひそと何かを提案した。「うん。やろう」と、孫は顔を輝かせ風呂場へ行った。後で尋ねると、夫は得意そうに「ピタゴラスイッチさ」と言う。何かと思ったら、孫の足をくっつけて持ち上げ、足先からボールを転がすのだという。「転がって、チーンだよ」と、にやっとした。「まあ。」私と娘が顔を見合わせたのは言うまでもない。「男の遊びねえ。」「ほんまやわあ。」

夫は生来おっくうがりだ。自分の部屋に籠をもって、趣味なのか仕事なのか、小難しい本を読んでいる。その男が、風呂でのピタゴラスイッチを発見した。なんと自由な発想だろう。自由な発想をする人がいると、自由な発想をするようになるのだ。「あなたも、ただ今、成長真っ最中ね。」わたしは、にやにやした。



●いまぜき　のぶこ＝1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987童心社　青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995国土社　青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』づくり」2003　PHP研究所　など多数

●せんだ　みつる＝1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

ぬちどうたから（命ど宝）

畑　裕子

イラスト：徳永 拓美

限りなく青い沖縄の海。その海辺の公園で沖縄の人々の怒りが今、頂点に達している。太平洋戦争末期の沖縄戦で日本軍が住民に「集団自決」を強制したとの教科書の記述が削除されたことに対しての沖縄県民の抗議である。

検定意見の撤回を訴える十一万人の人々の中に私は亡き井伊文子さんの幻影を見た。沖縄の人々をこよなく愛し、多くの著書の中で「悲惨な戦争の犠牲にあっただけでなく、今なお、米軍の基地があるために悲しい出来事が起きている」ことを訴え続けてきた最後の琉球王の曾孫である。また元彦根市長の故井伊直愛氏の妻であった方である。

県民の憤りの記事が新聞やテレビで報道され、その記憶もあせないうちにまたも、沖縄で悲しい出来事が続いている。米軍人による少女暴行事件などである。私は文子さんの憤り、そして彼女が生涯大切にしていた曽祖父尚秦氏の言葉を思い出した。

尚氏は廃藩置県で沖縄から東京に移る際、沖縄の人々に次のようにうたったという。「戦さ世しまち　みるくせややがて　嘆くなよ臣下　命ど宝」と。これは、戦の世も終わった、つらい悲しいこともあろうが、いのちは宝なのだから大切にしよう、という沖縄の人々への元王のメッセージであった。

ところが、このメッセージは無惨な沖縄戦で、さらに第二次世界大戦後から六十余年を経ようとする今日においても届かないでいる。

血を吸いし島の仏桑が焔なし
　　狂い咲くらむ夏のまさかり

文子さんは一九七二年、沖縄の本土復帰を記念して『仏桑花燃ゆ』を出版する。その序文を頼まれた石川洋氏は「戦争の原因をもたない島が、なぜ再び、尊い犠牲の上に悲しい運命を負わされなければならないのか。この試練を私達は沖縄の問題としてのみかたづけてはならないのである…」と記す。

たくさんの歌やエッセーを出版された文子さんだが、多くの著作から彼女の熱い沖縄への思い、そして命は宝、という強い思いが伝わってくる。

沖縄返還の前後、学生であった私は沖縄からきていた友の言葉を忘れることができない。本土復帰するまでの彼女たちの身分は留学生であり、パスポートが必要であることを知った私の驚き。家にいても絶対窓を開けないようにと、彼女らは常々両親から口うるさく言われ続けてきたという。何十年も前のこと、クーラーなど一般家庭には普及していなかった時代である。それにもまして彼女たちが少女時代から受けねばならなかった精神的苦痛が思われた。

美しい沖縄の海をテレビ画面で目にするたびに複雑な思いが去来する。亡き文子さんの思いがオーバーラップしていく。

沖縄の人々の命を脅かしているだけでなく、沖縄の海の代名詞となっているサンゴまで存在の危機に瀕している。

青い空と青い海はいつしか私の脳裏で南太平洋上のツバル島につながっていく。亀の背に乗ってこんな島に到着したなら浦島太郎のように時の経つのも忘れてしまいそうな桃源郷とでも言いたくなりそうな島である。が、この桃源郷はとんでもない事態に直面しているのだ。沖縄と同じように何の罪もない人々が、である。

ツバル島は地球温暖化のために海面が上昇し、島が消えて亡くなるという悲愴な現実に直面している。「生まれ育った島を離れるのはつらい。だが、今の状況ではいつまでここに住むことができるのやら」島民の憂いを帯びた眼を忘れることができない。

いったい、彼らがどのような悪事を働いたというのだろう。石川氏の言ではないが、何の罪もない人々が悲しい運命を背負わなくてはならないとは。

少し前までは青い海を見ると心の奥底まで青色に染まり清々しい境地になったものだが、最近は、青は痛みの色と化してしまった。それでもやはり青い海と青い空は心のどこかで郷愁を感じさせてくれる。海が生命の源といわれるゆえんであろうか。いや、人間にとって青は希望の色なのかもしれない。

沖縄を思うたびに亡き井伊文子さんのことが偲ばれる。

畑裕子

●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」(京都新聞社)、「守山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育研究所)、「甲賀のむかし話し」(サンライズ出版)、「イルカをおそった黒い波」(汐文社)など。レイカディア大学「手作り紙芝居講座」講師。

日本の精神

Japanese mind

「人間の学」（森信三先生著）を読む

その三

Study of “ Human nature” written by Professor Shinzo Mori

井上 昌幸

今回も第一部「生き方の基本」から大切な箇所を抜粋していきます。

八．大いにからだを鍛え、本を読もう

○からだの鍛錬

・自分の身体はどこまでも自分で鍛えよう

・ラジオ体操を行なう

・毎朝一定の距離を歩くもしくは走る

・毎朝深呼吸をする（朝の新鮮な空気を身体中に吸い込む）

○大いに本を読もう

・我々人間が、この「二度とない人生」を、一体どう生きたらよいか、つまり我々人間の生き方について学ぶには、どうしても読書が根本的に必要になってくると思います。

○よい本の書写

・「よい本を書写する」ことは大変手間のかかることですが、しかし反面からは、非常に力のつく読み方といえます。

○読書の有益

・　私共は広く本を読むことによって、居ながらにして古今東西のすぐれた人に接したり、あるいはまた、世間的には広く知られていないけれども、真実な生き方をした人々に接して、自分も人間としての行き方を教えられるわけです。皆さん方も、今のうちに「本を読む習慣」を身につけられるように。

安岡正篤先生は「大和的生活法」の中で、「適当な運動をしているかどうか」と問いかけています。人それぞれのやり

方があると思いますが、「毎日一定の距離を歩くこと」を続けることが大事でしょう。最近の調査では本を読む人が少なくなってきています。沢山の本を読む必要はありませんが、自分にとって何かプラスになると思われる本を見つけて時々読み返すことも大切です。論語の「学びて時に之を習う、またよろこばしからずや」をよく味わいたいものです。

九．自由に文章の書ける人に

○文の書ける人に

・人間は自分の考えを、少なくとも親しい間柄の人には、手紙で十分に伝えられるようでなければならない。もしそれが出来ないとしたら、この世の中に生きてゆく上で大いに差しつか支えることになります。

○文章を書く練習

・「習うより慣れよ」であって、常に書くことをおっくうがらぬようにすること。

・「日記をつける」ということは手軽に文章が書けるための一番楽な、手っ取り早い方法だと思います。

・文章が書けて、自分の考えを自由に発表できるということは、将来自分の道を開いてゆく上で、非常に有力な一つの武器となります。

最近はパソコンや携帯で文章を書く人が多くなって、手で字を書くことが少なくなってきています。今我々は長い歴史のある日本の文化を失おうとしていますので、もう一度日本語を読み書きできるようにしたいものです。

十．美について・詩について

○日本文化の根本的な特色

・我々日本人は、世界の他の色々な民族の中にあっても、「美」に対する感覚または感受性の面でかなり優れている方ではないかと思うのです。

・短歌や俳句のような短い詩型の文字が、一般の国民によって、ひとり鑑賞せられるだけでなく、すすんで創作もせられるということは、世界の他の国々ではまったく見られない現象といってよいようであります。

○日常生活においての美的感覚

・伝統的な民族の美的な趣味は大切に守るようにしていただきたいということです。生け花はもちろん、盆栽などの趣味も、いかにも日本人らしい趣味だと思うのです。

○詩のわかる人に

・人間の心情をもっとも端的に表現している点では、広い意味の詩の世界だといってよいでしょう。

・すぐれた短歌や俳句または自由詩を味わうということは、その人の心を清らかにする上で、非常に大きな影響力があるといってよいでしょう。さらに自分もそれを作って楽しむことができるのです。

私たちは春夏秋冬の四季の移ろいを味わい、山川草木など自然と共生することを大切にしています。奈良時代には和歌が作られており、万葉集・古今集などを読みますと、おおらかな抒情詩や叙景詩の世界にふれることが出来ます。

「田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高ねに雪は降りける」
また李白や杜甫及び日本人のつくった漢詩を味わいたいものです。

十一．人間の一生

○一回限りのマラソン競走

・我々人間の一生は、ただ一回のマラソン競走みたいなものでありまして、もしそうだとしたら、それについてコースの大体の見当がついているか否かということは、これを結果的に見ますと、大変なひらきを生じると思うのであります。

○決勝点の先にあるもの

・皆さん方が、人生の決勝点に入るには、まだ五十年以上もあるわけであります。「何とまあ遠い先のことか」というふうに考える人が大部分でしょう。しかし、むかしから、「光陰矢の如し」と言われていますように、その五十年が過ぎ去った後になりますと、何とわめいてみましても、もう決勝点は眼の前に迫っているわけです。

○一日一日の充実を

・現在自分は、決勝点まで、一体どれほどの手前の処を走っているか…ということを、つねに忘れないということが大切であります。

○われわれ人間は、人生の決勝点に入るまでの自分の人生の長さを、心中つねに忘れぬように、一日一日の「生活」の充実を期せねばなりません。

○照る日曇る日

・人生のコースは、幾つかの紆余曲折があり、人間の一生というものは、じつに転変極まりないものであります。すなわち人間の一生には、「照る日もあれば曇る日もあり、また上り坂もあれば下り坂もある」というわけであります。

…根気づよくしんぼうしていれば、必ずやいつかは晴れる日がくるものであります。

論語に「吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳したがい、七十にして心の欲する所に従えども、のり矩をこえず」と書かれています。年代の節目節目に自分の生き様と照らし合わせて自らを省(かえり)みたら如何でしょうか。

井上昌幸

●いのうえ まさゆきII1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、関西師友協会活学塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
〈資格〉ISO14000&9000審査員補

〈MOH-ECOTOURISM−9〉

ツーリズム最前線 —新穂高

檀上 俊雄

わさび平小屋、鏡平山荘、双六小屋、黒部五郎小舎とそれらを結ぶ小池新道からなる双六山楽共和国。写真の鏡平山荘は全面改築されて、共和国のゲストハウス的存在。大自然の真只中にあるエコロッジに泊まると、シンプルで、アットホームな雰囲気に驚く。エコとは、最先端技術やコストに、ハートがともなってこそのものかもしれない。

白馬、尾瀬、屋久島、高島トレイルと、山岳観光地を概観してきた。エコツーリズムにおいて、山は植物の垂直分布やそれに対応した生態系を持つ、多彩な自然が残る貴重な場所である。『「水」戦争の世紀』（バーロウ他、集英社新書２００３）という時代のなかで、日本において最大の資源というべき上質な水の源としての重要性、さらには厳しい気象条件下で取り組まれている山小屋などの最先端をゆく環境対策のさきがけとして、とても重要なポジションにある。

琵琶湖などの閉鎖水域での取り組みに、こうした山岳観光地で着々と成果を上げている事柄を加味することができれば、より強固な将来的な展望も得られるにちがいない。環境への取り組みには極限状態でのシミュレーションが欠かせないからだ。そしてエコツーリズムはすべての先進地に光をあてることで、新しい旅としての大きな効用も生まれてくると考えられる。そうしたなかで、今回はアルプス３０００ｍの新穂高に注目してみよう。

鎗穂高連峰の西側には、平湯、福地、新平湯、栃尾、蒲田、中尾、槍見、新穂高と温泉地が続く。奥飛騨温泉郷観光協会は、強力なリーダーシップを発揮して、国立公園にふさわしい山岳観光地づくりを推進してきた。平湯は、安房トンネルで沢渡、中の湯を経て上高地と結ばれ、さらに平湯峠から乗鞍岳への起点でもある。中尾は焼岳の登山口であり、新穂高は西穂高へのロープウエイの乗り場となる。川は蒲田川といい、谷は直線的で深いが、車道から鎗穂高連峰ばかりか、対岸に笠ケ岳連峰が見渡せるロケーションの良さが、湯量の豊富な温泉とともに持ち味だ。

特に新穂高は、槍穂高、笠ケ岳、双六岳への登山口として知られる。槍ケ岳など、岩の殿堂滝谷下を通る魅力的なコースは、上高地のコースと比べ、約6キロも行程が短い。アルプスの垂直分布を体感できる、西穂高千石平への新穂高

ロープウエイもあって、多くの旅行者に日本を代表する山と自然の雄大さを知らしめている。

少し前の話になるが、双六小屋に泊まった翌朝に、地元上宝村（現在は高山市）に今も続く、地元中学生の父兄同伴登山の団体と一緒になった。小屋の主人が皆を出迎えるのだが、子供そっちのけで父兄が盛り上がっている光景が不思議であった。聞けば、父兄に山小屋の関係者が多く、シーズン中は多忙であり、顔を合わせるのは久しぶりだという。穂高岳山荘、槍ヶ岳肩の小屋、槍平小屋、笠ヶ岳山荘など、この一帯の多くの山小屋はほとんどすべて上宝の人が作り、経営するところであり、北アルプス山小屋友好会としてネットワーク化され、相互扶助の関係にある。そうした事情もあって、この時は子供はおいてきぼりにされ、会の臨時総会の場と化してしまったのだ。

それぞれの山小屋では競うようにソーラーや風力による発電に、いち早く着手し、居住性、食事、トイレ、ゴミ処理など、あらゆる部門でエコ対応がなされてきた。厳しい自然環境下だけに、惜しみなく最先端技術が導入され、かつての素朴な山小屋の面影はないくらいだ。そうしたなかで一軒一軒が運営面で持ち味を出しながら、役割分担し、全体を構成する。これに飛騨山岳ガイド協会がきっちりと連係するのである。遭難対策も、岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会として機能する。すべてが質量ともに日本でトップレベルの水準だ。観光面での奥飛騨温泉観光協会とも見事に連携する。こうした取り組みが、民間主導で行なわれていることは特筆すべきだろう。

新穂高から双六山楽共和国のエコロッジを泊まり歩く山旅は、登山経験の少ない人にもおすすめできる。写真は、鏡平からの槍ヶ岳。

エコへの取り組みは、先端技術、行政指導、将来への投資という側面から進められることが多いが、総体として結果を導き出すことが求められることから、地域コミュニティが加わらない限り、将来展望はなかなか見えてこない。各地で先行する行政主導の取り組みの中には、維持管理面で赤ランプが点滅する事例が多い。コスト的な原因に見えるが、実はその大半が地域で十分に理解が得られていない状態であり、最低限の運営を余儀無くされているという現実がある。

健康で持続可能な生き方を求める人の必須科目は地理であり、エコ最前線を知るためには登山は欠かせない。温帯から亜寒帯までの植物の垂直分布は、日本にいながらにしてシベリアやアラスカを旅しているようなもので、

新穂高の山の反対側は上高地であり、国立公園としての管理が行き届き、日本の山岳観光地の頂点にある。多くの人が河童橋に立って、槍穂高、蝶常念の連峰の水を集めて流れ出る梓川の清冽さとアルプスの風景に感動し、登山に目覚める。と同時に、バスターミナルや旅館、遊歩道などの人工的なものが、自然にすっかり馴染んだ様子にも心をなごませることになる。

とはいえ、ひとつの川の水源地帯に年間２００万人が訪れる状態は明らかにオーバーユースであり、汚水処理などのことを考えれば、旅行者の分散化や、上高地のターミナル機能を段階的に焼岳が作った大正池より下流へ移し、上高地は現在の横尾や徳沢のように歩きの場所とすることも必要となってくるだろう。ここに乗り入れるバスやタクシーはすべてエコ対応が必要であることはいうまでもない。

上高地を流れる梓川は、信濃川支流犀川源流にあたる。新穂高の蒲田川は、神通川支流高原川の源流域にあたる。乗鞍岳は中央分水嶺の最高峰であり、太平洋に流れ出る木曽川支流飛騨川がここから始まる。槍穂高、乗鞍岳から黒部川源流一帯に及ぶ地域は、日本を代表する大水源地帯のひとつであり、最高レベルでの保全と利用の接点が求められる。こうした中での、安房トンネル・平湯温泉をターミナルとして、上高地の過密を抑えるべく、新穂高のエコツーリズムの取り組みは着実に進んでいるが、登山拠点としての山小屋のエコロッジ化は、この地域全体の自然環境の保全に大きな力となる。

誇るべき地域コミュニティによって持続可能な状態であることと、厳しい自然環境下でめざましい成果を上げていることは心強いかぎりであり、今後さらに日本のエコを強力に推進する、一大センターとしての期待も込めて見守りたい。

檀上俊雄

●だんじょう としお＝1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／「比良山・湖西の山」山と渓谷社（共著）

高島森林体験学校開校!!の巻

作：オバユキ

さて。そんな地域
猟師のひとりを
ご紹介しましょう。
まずは、
まつばらあきお
松原秋夫さん。
高島市朽木平良の
キャンプ場経営。
猟師でもある。
60才を過ぎた今でも
愛犬と山をかけ巡る
現役猟師。
しとめたシカは、
自分で
解体し、
シカ肉や
シカくんせい肉
として
出荷
されたり、
「平良キャンプ場」で
バーベキューで
たたきで
食べて
もらう
こともできる。
平良キャンプ場と
どんな
町かな、
と、まわってみると、
松原さんが
シカの
炭火焼き
を
用意して
待っていてくれた。
遠慮なく早速
いただくと
「んーうまい!!」
くちみ
もなく!!
そやろ。この味を
都会のんにも
知ってほしいんや。
と、言いながらも
松原さんが少し心配して
いるのは、高島市の
シカの数が
増加していること。
田畑の被害も
多くなり、
山菜も
とれなくなり、
山村の潤いが
なくなりつつある。

どうか…
「シカをどんどん撃って
くれ」と言われるけど、
シカも人間も同じ命や。
わしらも遊びで
殺してるわけとちがう。
そこで、大事な命を
奪った以上は、無駄を
食べることをせんと
あかんと思うんや。
ほんで、みんなに頼んで
まで来てもらって
獣のこと、山のことを
知ってもらい
ながら、野生の
味も味わってほしいんや!!
さて、もうひとり
紹介する地域指導者は、
中村 よしなが 美重さん。
中村さんは、高島市
新旭町にある「もりっこ」
を管理
する。
NPOクラヤマネット
の理事長。
「もりっこ」のある場所は
山、田、畑が一望できる
里山。
地域と歴史と人間と
森林、水、ほこりと
関係があったんや。
それが今、
だんだんうすれてきとる。
昔は山の神、水の神、
火の神、森の神…なんか
の心がある、
という
自然を守る心が普通にあった。
今はそれがないんやー!
…と、嘆くだけでは
止まらない中村さん。
地域と自然を大切に
想う熱い心を
お持ちなのデス!
お前、これをみて
どう思う?
大きな

●オノミユキ（本名 加藤 みゆき）＝1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村（現高島市）に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

講演日記

A lecture diary

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。3月～4月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

滋賀の教師塾

びわ湖フォーラム

- 日時：3月7日（金）
- 主催：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
- 演題：持続可能社会を必要とする背景
- 会場：コラボ滋賀21
- 参加：100名
- 講師：石井吉徳、西岡秀三、内藤正明

野洲生活学校設立30周年記念式典

式典風景

- 日時：3月14日（金）
- 主催：野洲生活学校
- 演題：もったいない・おかげさま・ほどほどに・MOH理念
- 会場：野洲まちづくり協働推進センター
- 参加：70名
- 講師：辻村琴美

新入社員研修

- 日時：3月14日（金）
- 主催：新江州株式会社
- 演題：MOH通信とは
- 会場：社内会議室
- 参加：10名
- 講師：辻村琴美

滋賀の教師塾

- 日時：3月15日（土）
- 主催：滋賀県教育委員会事務局教職員課
- 演題：もったいない（循環）・おかげさま（共生）・ほどほどに（抑制）が環境と人間を育てる
- 会場：ピアザ淡海
- 参加：130名
- 講師：森建司

市民で取り組む資源循環型の野洲市へ

- 日時：3月16日（日）
- 主催：野洲市環境基本計画推進組織
- 演題：私（地域）の暮らしは自分で創る
- 会場：コミュニティーセンターぎおう
- 参加：40名
- 講師：辻村琴美

MOH通信執筆者懇談会11

- 日時：3月17日（月）
- 主催：MOH通信
- 演題：20号と21号について
- 会場：がんこ京都
- 参加：12名

eプラザ見学

- 日時：3月21日（金）
- 主催：高島市エコライフ推進協議会マキノ支部
- 演題：視察研修
- 会場：eプラザ
- 参加：25名
- 案内：辻村琴美

コミュニティ・マネジメント特論

- 日時：4月18日（金）
- 主催：滋賀県立大学・近江環人地域再生学座
- 演題：中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営
- 会場：交流センター
- 参加：25名
- 講師：森建司

【森林セラピー基地「びわこ水源の森たかしま」認定】

■高島市全域の恵まれた自然条件や森林資源が、社団法人国土緑化推進機構により、森林セラピー基地「びわこ水源の森　たかしま」として認定された。これに伴い森林セラピー基地内の朽木地区には3つの森林セラピーロードが登録された。

高島市では今後、森林と心身の健康を結ぶプログラム開発をはじめ、森林セラピーロードの追加登録や森林セラピー協議会の立ち上げなど、社会の自然・健康志向のニーズと地域振興を結びつける活動を、地域住民や関係機関と連携しながら取り組んでいく。

【棚田保全活動】

■ 自然の中での農作業を通し棚田を守っていく棚田保全活動は、平成16年大津市仰木平尾地区でスタートした。その後、米原市や高島市、甲賀市など実施地域も増え、参加者はのべ1200人を超えた。県では今年も参加者を募集している。

問合せ：滋賀県農政水産部農村振興課農村企画担当
☎077（528）3961

【キャンドルナイトinたかつき2008】

■地球温暖化防止のために省エネルギーを訴えるイベントが「キャンドルナイトinたかつき2008実行委員会」の主主催で行われる。

問合せ：たかつき環境市民会議
☎.072（675）4646

（1）「でんきを消してスローな夜を」6月7日（土）～22日（日）
高槻市全域において夜間のライトダウンを実施。

（2）講演会：「もったいないことしてまっせ」
・講師：福田正巳アラスカ大学教授
・日時：6月7日（土）14時～16時
・場所：高槻市城内公民館
・参加費：無料

（3）キャンドルナイト・チャリティーコンサート
●フレンズコンサート（蛍の夕べ）
・日時：6月14日（土）19時～20時30分（雨天：15日）
・場所：フレンズパーク（摂津峡　上の口）
・出演：オカリナグループほか
・映像：人類を育んだ地球46億年の旅
●あくあぴあコンサート
・日時：6月21日（土）19時～20時30分（雨天：28日）
・場所：あくあぴあ芥川
・出演：音楽団管楽部・芥川高校和太鼓
・映像：人類を育んだ地球46億年の旅

【びわ湖トラスト】

■びわ湖を中心に、湖沼に関する調査研究支援をはじめ、環境修復支援、情報交換、環境教育事業、市民活動支援などを行う「びわ湖トラスト」が、2008年4月設立された。現在このトラストの会員を募集している。

詳細：☎0740（20）1866
http://www.biwako-trust.com/

【滋賀会館大ホール引退　県文化振興事業団が晴れ舞台を演出】

■滋賀県民に愛された「滋賀会館大ホール」（大津市京町）が55才を目前に幕を閉じる。コンサート、演劇、映画などが楽しめるホールとして県民に親しまれていた。

現在は指定管理者「県文化振興事業団」が運営している。同事業団の竹村憲男さん（49才）は「昨年の十月に大ホール使用停止を知りました。大ホールにありがとうを言える場をつくろうと決心しました」。

思い出の詰まった会館で『滋賀会館OKINI（お～きに）コンサート』を企画。

『加藤登紀子琵琶湖周航の歌コンサート』を9月15日（月祝）午後4時開演。『ゆかりのアーテイストによるコンサート』を9月27日（土）午後3時開演（ともに有料）。

劇団かいつぶりの演劇公演や、懐かしの映画上映、OKINIコンサートも企画中。9月は目が離せない。

問い合わせ：滋賀会館
☎077（522）6191

ホタル

三山 元暎

さし絵：中川 善雄

ホタルの季節がやってきた。

春先に雪が多い年はホタルが大発生するという。今年はまさにそう。三月はじめまで雪が舞い、春が待ち遠しかった。なにせ、あなた任せの自然の世界、はたして言い伝えどおり大発生するだろうか。

わが古里、伊吹山麓では、毎年少しずつ発生場所を変えながら、夜毎、いたるところで青味をおびた黄色の無数の光が帯となって夜空を焦がす。

一時減ったホタルも地域の人びとの地道な保護活動の甲斐があって復活し、子どものころに見た光景に戻りつつある。

ホタルのオスは飛びながら明滅を繰り返し、メスは葉の上で光りながらオスを誘う。わずか十日ばかりのはかない命を、ひたすら恋に燃やす。その求愛の光の中に、人びとはさまざまな思いを重ね歌にしてきた。

ゆるやかに着てひとと逢う蛍の夜　桂　信子

人揺りてこころ問ひたき蛍の夜　佐野　美智

近くの古刹、観音寺に奉納されている天保年間の大額には、次のような歌が納まっている。

飛蛍うちの河風さ夜ふけて
ひろはぬ袖に玉そこぼるゝ　佐渡子

ゲンジボタルの光に「方言」があるという。オスが光を同調させて飛ぶときの明滅間隔は関西で二秒、関東は四秒。人間同様、ホタルの世界でも関西系はせっかちなのかしら。

三山元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本をご紹介します。

BOOKS

地球環境問題入門
―地球は泣いています

●著者／飯井基彦
●発行所／ナカニシヤ出版
●価格／1900円＋税
●内容／水、食料、資源、エネルギーなど人間が必要とする要素別に環境問題を論じる。

講談社現代新書
法律より怖い「会社の掟」

●著者／稲垣重雄
●発行所／講談社
●価格／700円＋税
●内容／企業不祥事が相次ぐ昨今。会社や社員が無意識に従っている「会社の掟」に問題があるのではと考察。MOH通信の編集協力者でもある著者が、健全な会社と社会の関係について、MOH通信なども取り上げ提言を試みる。

コミュニティ・ラーニング―
組織学習論の新展開

●編者／吉田孟史
●発行所／ナカニシヤ出版
●価格／2200円＋税
●内容／コミュニティはどのように知識を創造し、獲得、普及、蓄積していくのか。NPOと地域、地域企業、企業間関係などにおける学習のあり方を考察。

DVD近江聖人中江藤樹

●企画・制作／高島市 映画「中江藤樹」制作実行委員会
●発行／近江聖人中江藤樹記念館
●監督／矢田清巳
●出演／原田龍二、小田茜
●価格／2500円
●内容／約400年前の大洲藩。郡奉行の中江藤樹は脱藩して、故郷小川村へ帰り、家族や村人の中で、出世や名誉が目的ではない学問を実践していく。個人や企業の倫理が崩壊した現代人に生き方を問い直す。

南大萱という世界

●編集／龍谷大学教授吉村文成
●監修・発行／南大萱資料室
●内容／2007年4月、龍谷大学里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センターで行なわれた「大・南大萱展―瀬田のいまむかし」の図録。

IPCC第4次評価報告書のポイントを読む

●発行所／独立行政法人国立環境研究所　地球環境研究センター
●内容／政府間パネル（IPCC）が07年に、地球温暖化に伴う気候変動に関する研究成果を第4次評価報告書にまとめた。そのエッセンスをコンパクトに紹介した冊子。

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

《 MOH通信概要》

■目的

(1) 循環型社会構築に向けた意識改革

(2) 浪費型社会通念の脱却

(3) 人生哲学を学ぶ

■事業

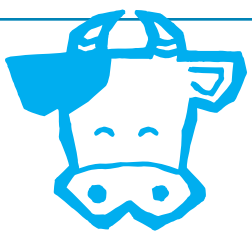
(1) 通信の発行及び出版

(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp

代表:森 建司
担当:辻村 琴美



「M·O·H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M 循環 →もったいない　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O 共生 →おかげさま　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H 抑制 →ほどほどに　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

読者の声

★MOH通信、皆さまのお気持ちがよく伝わってまいります。時折に読み返していきたいご本です。
西本梛枝（兵庫）

★MOH通信19号4ページ掲載記事、森代表の「転換力」に感動です。持続可能型社会へ移行していくには、自分の持っている知識をゼロにして、一つひとつを本当に必要かと見直す事だと思いました。
浜田伝（大阪）

★MOH通信にはよく若い人が登場しますが素晴らしいことですね。豊かな一部の老人と若く貧しい人という構図、現状は見事に分断されていてゆゆしき状況です。若い人をフリーターとして使うだけでなく、投資する、育てることは欠かせないことです。
壇上俊雄（滋賀）

★MOH通信に載せていただいたおかげで、トキプロジェクトについて毎日新聞の記者の方から取材を受けました。ありがとうございます。
松田千春（滋賀）

★MOH通信18号を「埼玉県環境計量協議会ニュース」で紹介させていただきます。
広瀬一豊（埼玉）

★『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営』（森建司著、サンライズ出版刊）を、お薦め書籍として紹介させていただきました。
コムケア 佐藤修（東京）

★19号の中で『森と企業をつなぐ「森の町内会」』の活動は新しい取り組みで、実践へとつながることが期待できると思います。
江竜喜信（滋賀）

★森林体験学校の開校式では、お世話になりました。藤樹さんの関連資料をお届けします。
海東英和（滋賀）

★もったいない
堂上勝己（大阪）

★田舎暮らしは危機にも強い
福島和人（大阪）

★今の時世に貴重な記事が多く、有難く読ませていただいています
佐藤満男（滋賀）

★ポリテクカレッジの授業に使わせていただきます
木戸則雄（滋賀）

《次号予告》
2008年8月発行予定

■特集：わたしが創る未来の暮らし

- 対談／「未来の暮らしのつくり方」
  滋賀大学学長・成瀬龍夫 ＋ 森建司
- 対談／「命どう宝」畑裕子 ＋ 中井二三雄
- インタビュー／「沖縄の環境活動」ウルムイのみなさん
- 取材／「沖縄への貢献」導きプランニング
- フォトエッセイ／沖縄
- 取材／「農業の新星」田中小有里、前田壮一郎
- 体験／「建築端材でオモチャつくり」三和設計
- 連載／通常通り　　ほか

※ 敬称略、予告なく変更いたします

編集後記
editing voice

滋賀には文化が根付いています。今回の取材にあたって地域の方が、子どもたちに古の教えを伝承する姿勢には、敬服しました。大人が心の背筋を伸ばさないと、子どもたちに笑われます。まさに、己を正す事が三方よしにつながるんですね。反省しきりです。

（つじこと）

《M·O·H通信》受付中！

あなたも「M·O·H通信」を読んでみませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		
電　話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.20（通巻21号） 2008年5月末日発行　発行部数4,500部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局

代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
編集協力　稲垣 重雄
　　寺川 智美
取　　材　細井 美保
　　古田 紀子
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
印　　刷　新江州（株）情報C
ブ ロ グ　松崎 和弘

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
（社）滋賀県社会福祉協議会
高島市
［執筆者懇談会］
内藤 正明　山口 美知子
海東 英和　堤 幸一
下西 康嗣　進 ひろこ
末永 國紀　中村 誠
花田 眞理子　奥山 武生
弘中 史子　結城 美枝子
今関 信子　松崎 和弘
山崎 隆　井上 昌幸
三山 元暎　辻村 耕司
加藤 みゆき　佐々木 洋一
笹山 千怜　畑裕子
清水 安治　徳永拓美
檀上 俊雄　中井二三雄
（順不同、敬称略）

●支援
新江州（株）
〒526−0111
滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://mohmoh.jp/

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。